

教養諸學研究

第百五十一号
(2022年度・1号)

『ペーター・フーヘル訳詩ノート 5』

..... 齊 藤 寿 雄

VO 構造を主語とする中国語形容詞述語文

..... 伊 藤 大 輔

2020年東京オリンピック招致にかんするテレビ報道の共振性

..... 井美奈子・中村 理

早稲田大学政治経済学部

教養諸学研究会

2023

目 次

『ペーター・フーヘル訳詩ノート 5』	齊 藤 寿 雄	1
VO 構造を主語とする中国語形容詞述語文	伊 藤 大 輔	21
2020年東京オリンピック招致にかんする テレビ報道の共振性	井 美奈子・中村 理	43

『ペーター・フーヘル訳詩ノート 5』

齊藤 寿雄

本書のテキストは、Peter Huchel: Gesammelte Werke in zwei Bänden. Hrsg. v. Axel Vieregge. Band I: Die Gedichte. Band II: Vermischte Schriften. Suhrkamp Verlag, Frankfurt am Main 1984 を使用し、本文中では GW I, II と略した（略号につづく数字は頁数を表わす）。

第1章

『返答』（1968年初出）

Antwort

夜と夜のあいだの
つかの間の昼。
農場が残っている。
そして狩人が藪のなかで
わたしたちに仕掛ける罠。

昼の荒地。
それはまだ石をあたためる。
風にまぎれた虫の声、
ギターの弦のうなりが
坂道をくだる。

枯れた葉の
火繩が
壁際でかぼそく光る。
塩のように白い空気。
秋の蘩、
鶴の渡り。

明るい木の枝のなかに
時鐘が消えてゆく。
蜘蛛が
齒車の上に
死んだ花嫁たちのベールをかぶせる。

Zwischen zwei Nächten
der kurze Tag,
Es bleibt das Gehöft.
Und eine Falle, die uns
im Dickicht der Jäger stellt.

Die Mittagsöde,
Noch wärmt sie den Stein.
Gezirn im Wind,
den Schwirren einer Gitarre
den Hang hinab.

Die Lunte
aus welchem Laub

glimmt an der Mauer.
Salzweiße Luft.
Pfeilspitzen des Herbstes,
Kranichzüge.

Im hellen Geäst
verhallt der Stundenschlag.
Spinnen legen
aufs Räderwerk
die Schleier toter Bräute. (GW I. S. 175 f)

これは、第四詩集『Gezählte Tage』（余命）のなかの最初から2番目に出てくる詩である。初出は“Neue Deutsche Hefte 15”（1968年）、Hefte 117である。

1968年は、フーヘルが、1962年文学雑誌『意味と形式』（Sinn und Form）の編集長を解任され、翌年から1971年までポツダム近郊のヴィルヘルムスホルストの自宅に軟禁されて5年目の時期である。詩集『余命』はこの隔離期間に書かれた詩をまとめた。この詩集全体を覆う暗い絶望的な雰囲気は、手紙も雑誌も手に入らず、訪問客もほとんど来ず、東ドイツ当局からさまざまな嫌がらせや抑圧を受けて完全に孤立した詩人の心情を映しだしている。

表題の『返答』は、ボードレールの『万物照応』のように自然と人間の間の交感をテーマにしている。しかしボードレールが、人間の5感にもとづいた自然と人間の神秘的な統合（合一）のなかで精神的な高みを目指した象徴主義の詩人である一方、フーヘルは、初期には自然を安全、安心の世界と見て、自然と人間の調和の世界、トーマス・ゲッツの言い方を借りると「魔法にかけられた世界」（Verzauberung）¹⁾を求め、後期は自然を警告の徴^{しるし}と見て、それを解き明かすことによって、「脱魔法化」（Entzauberung）²⁾として「世界状況」

(GW II. S.371) を洞察することをめざした。

表題の『返答』は、それ自体メタファーである。返答には問いが先行する。その問いはなにかといえ、フーヘルは自然観の変遷を見なければ解明されない。フーヘルは、あるインタビューで「少年時代はわたしにとって根源だった」といわしめるほど、自然と人間が一体化した統一世界に住んでいた。そこではすべてが魔法にかけられたように魔術と魔法が支配していた。たとえば 1927 年に詩作され、1947 年に発表された『星の筥』*Die Sternenreue* (GW I. S.83 f) はこう謳われている。

『星の筥』(1947 年)

おまえはいまなお浮かんでいるのか、太古の月よ。
 おまえの月輪がまだ若くして浮かんでいたとき、
 わたしは川のほとりに住んでいた、
 そこではただ水だけがわたしと暮らしていた。
 水音はひびき、歌となり、
 わたしは水をすくい、たましいは耳をすませた、
 水が石のまわりを音たてて飛びはね
 泡だちながら走り、さざめき下っていくのを。

煤を振りかけたようなふたつの岩が、
 水門のように切りたって狭く、
 あのころまだ川を取り囲んでいた。
 水のなかには星の筥が吊るされていた。
 わたしが筥を裂け目から引きあげると、
 いくつもの水晶の部屋がきらめき、
 藻の緑色の森がただよい、

わたしは黄金をすくいとり、夢のいかだを流した。

おお、世界の峡谷よ、押しよせる大波が
歌のようにやってきた。あれがわたしの人生だったのか。
あのころわたしは暗い宇宙のなかに
ごく間近に星の筥が浮かんでいるのを見た。

ここでは自然形象の水、月、川、石、星、筥等が、まさに魔法にかけられたように呼び出され、筥のなかにとらわれた星のきらめきが美しく描かれている。これは、少年フーヘルにとって至福の世界だった。この自然の世界でフーヘルはやすらい、その豊饒な自然の意味を了解していた。

しかし中期には、ナチスの抑圧と戦争体験、さらに戦後の雑誌『意味と形式』をめぐる文化当局との軋轢によって自然との一体感は失われてゆく。第2詩集『街道 街道』*Chausseen Chausseen*の最後から2番目の詩『アザミの根の下に』*Unter der Wurzel der Distel* (GW I. S.156) はこう謳っている。

アザミの根の下に
いま言葉が住まう、
身をそむけることなく、
石だらけの地中に。
火を防ぐ門だった
言葉はいつも。

おまえの手を
この岩壁の上に置くがいい。
金属の硬い
枝がふるえる。

だが夏は
空になっている、
期限は切れた。

下生えの
影が
その投網をかける。

フーヘルは、「自然のなかからなにものかを読みとるべき徴 — フーヘルは、つねにそのようにして自然と自己の関係を、すなわち彼の謂う『世界状況』を読みとってきた」³⁾。この詩に描かれたフーヘル其自然言語は、もはや世界との一体感をしめさず、自然からの疎外、「異化」をしめす暗号、記号となっている。すなわち対象となる自然とはべつものをあらわす徴となっている。アザミと石は言葉を守る砦としての意味をもち、言葉は詩人が生存を賭ける最後の武器となる。枝は、金属の寒々しさをつたえ、かつてフーヘルが少年時代を過ごしたアルト＝ランガーヴィッシュの田舎の夏の生活は記憶のかなたに去り、厳しい秋と冬の到来が予告される。最終連は影によって不吉な未来を暗示する。

このようにフーヘル其自然観は、少年時代の自然とのアイデンティティの統一から、中期の「不調和」⁴⁾へと移行し、とくに東ドイツ当局との軋轢による精神的苦悩をあらわす暗号、記号、メタファーの支配する世界に変わっていった。

それでは冒頭の詩『返答』に対する問いとはなんなのだろうか。それは、第3連の「秋の鎌、／鶴の渡り」が暗示している詩集『街道 街道』の巻頭詩『徴』*Das Zeichen* (GW I, S.113、初出1963年)を見ることによっておのずとあきらかになる。

しるし
『徴』

葉のない木立の丘、
もういちど
夕方連なった野鴨が
湿った秋の空気のなかを飛んだ。

あれは徴だったのか。
あわい黄色の槍を
みずうみは
せわしない霧に突きさした。

わたしは村をとおり、
見なれた光景を見た。
羊飼いが雄羊を
両膝のあいだに抱えこんだ。
彼はひずめを切り、
びっこの足の傷にタールを塗った。
そして女たちは缶を数えた、
毎日の乳しぼり。
考える必要はなかった。
すべては家畜血統登録簿に書いてあった。

ただ死者たちだけは、
毎時の鐘の響きとキズタの成長から
切りはなされて、
かれらは見ている、

地球の冷えきった影が
 月の上をすべっていくのを。
 かれらは、それがいつまでもつづくことを知っている。
 大気と水のなかで呼吸する
 すべての生物が死に絶えても。

だれが書いたのか、
 ほとんど解読できない
 警告の書を。
 わたしは杭に打たれたその書を見つけた、
 みずうみのすぐ裏手で。
 あれは徴だったのか。

硬直し
 雪の沈黙のなかで、
 盲目となって眠っていた
 マムシのひそむ藪。

「夕方連なった野鴨が／湿った秋の空気のなかを飛んだ」。ここでは鶴が野鴨になっているが、V字型に飛翔する姿は一致している。そしてそのあとに「あれは徴だったのか」と詩人は自問する。この「あれは徴だったのか」は詩のなかに2度出てくる。第5連ではより具体的に杭に打たれた「警告の書」が徴としてあらわれる。しかし詩の詩的自我はこの警告書を解読できない。すなわち詩人は、自然のなかにあらわれた暗号としての徴を読み解くことができないのである。自然はいつも詩人のまえに存在するが、自然が警告する文字を解読できない、すなわち「世界状況」を把握できないのである。フーヘルにとって自然はリーノ・ザンダースが言うように、「かつて世界が風景の相貌をとって

たとしたら、今は風景が世界の相貌をとる。世界は謎めいて、不気味で、威嚇的であり、多義的で答えをださない」⁵⁾ 記号、暗号、メタファーの世界になってしまったのである。

しかし詩『返答』では、この徴がまだ解読可能であることをしめしている。第1連では、脅威としての夜のあとのつかの間とはいえ明るい昼がかがやき、少年時代の故郷の祖父の農場はまだ記憶のなかに存在している。しかし狩人は、フーヘル詩ではつねに脅威をあたえる東ドイツの文化当局を指し、それがいま詩人に罠をかけることを詩人は感知する。第2連では、世界は荒地地になっているが、言葉の防御である石は健在である。故郷の重要な構成要素である虫の声が聞こえ、夕刻ギターがかき鳴らされ、坂の上からそれが聞こえる。この風景は長閑とした牧歌の世界を想起させる。第3連は、火縄に火がつけられることによってふたたび敵の脅威が徴となってあらわれる。「秋の鎌／鴨の渡り」は、すでに見たように警告の徴である。第4連では時を告げる鐘の音が自然のなかで消えてゆくことによって未来への希望が絶たれる。そしてこの時鐘に巣くう蜘蛛がその獲物を糸にからめる様は不吉である。

自然現象である農場、石、虫の声は、かつての自然との合一の象徴として理解されるが、全体は迫りくる脅威の徴で覆われている。この二元性のなかでしかし詩人は自然からその警告の徴を解読している。その意味で「返答」は、「あれは徴だったのか」の問いに対する回答としてこの時点ではまだ有効である。

フーヘル詩は、第2詩集『街道 街道』 *Chausseen Chausseen* から第4詩集『余命』を経て最後の詩集『第9時』 *Die neunte Stunde* に進むにつれて韻律と形式において大きく変化している。1950年代以降の詩の特徴は、定動詞の減少、比較の *wie* の消失、1行の長さの短縮、複合語の意外な組み合わせ、規則的な韻律の解体、形容詞の簡素化、2格支配の多様化、物語性の欠如、単語数の減少等である。この傾向を詩『返答』に当てはめると、まずどの行も韻を踏まず、3語～5語からなっていて、第2連1行目と第3連1行目は1単語になっている。定動詞は、第1連の *bleibt*, *stellt*、第2連では *wärmt*、第3

連では *glimmt*、第4連では *verhält* と *legen* の6つだけである。したがって物語る性格はここではひじょうに弱いと言える。複合語は、*Mittagsöde*、*Salzweiße*、*Pfeilspitzen*、*Kranichzüge*、*Stundenschlag*、*Räderwerk* である。形容詞は1語だけであとは名詞の合成語である。最後の2語を除いて（これらの単語は辞書に載っている）いずれもフーヘル独特の単語の組み合わせになっていて、文を緊縮させるのに役立っている。2格用法は、*das Schwirren einer Gitarre*、*Pfeilspitzen des Herbstes*、*die Schleier toter Bräute* の3か所で、これは *Eine Gitarre schwirrt*、*Der Herbst ist Pfeilspitzen*、*Tote Bräute tragen die Schleier* と言い換えることができる。また *Salzweiße Luft* も *Luft ist salzweiß* となる。これらも文の引き締め効果をもっている。さらに音を見ると、「j」音と「l」音が多用され、とくに第3連では「l」音が頭韻、第4連では「j」音が頭韻となって、鋭い音と緩慢な音が交互して詩の緊張を高めている。またアンジャンプマンも多用され、意識の凝滞をうながしている。

トーマス・ゲッツは、この過程を *Entzauberung*（脱魔法化）と呼んでいる。これは、魔法化された少年時代の世界がナチス時代と戦争体験によって現実に突きあたり、魔法の世界が解かれてより現実的な世界を直視することを意味する。さらにフーヘルは、1950年代以降東ドイツ政権による土地政策の変更と雑誌『意味と形式』をめぐる当局との軋轢によってより厳しく現実に立ち向かわなければならなくなった。この過程でフーヘルは、自然形象をもちいながらも暗号、記号、メタファーによって政治的内実を吐露する傾向を強めた。これが脱魔法化の状況証拠である。

このように第2詩集以降の詩が、短縮化と簡素化に向かったのは、フーヘルにとって必然だったかどうかはここでは追求しないが、しかしそれ以降の詩が、さまざまな技巧をつかって詩の「シンタクスと形象における欠乏か短縮を経て、それらがこの言語の伝達特性をいちじるしく弱め、最終的に沈黙の淵に定着し、かろうじて部分的に解明されうる暗号言語」⁶⁾ となったのはたしかである。この暗号言語は、しかし読者の理解を拒むかのようにますます難解に

なり、最終的に「沈黙、空虚、黙し」⁷⁾へといたる。これは、フーヘルが晩年苦しんだコミュニケーションの齟齬に通底する。

『返答』にはフーヘルにとってまだ自然の徴を理解する余地が残されている。彼は、生涯一貫してもちいた自然形象によって、過去の記憶を振りどころにしながら、不吉な影におおわれた現在の「世界状況」を洞察するすべを知っている。政治的な抑圧に耐えながら、国内亡命を強いられたフーヘルは、この「世界状況」にひとつの答えをしめしたのである。

註

- 1) Vgl: Thomas Götz: *Die brüchge Idylle. Peter Huchels Lyrik zwischen Magie und Entzauberung*. Peter Lang GmbH, Europäischer Verlag der Wissenschaften, Frankfurt am Main 1999
- 2) Ebd.
- 3) 齊藤寿雄：『ペーター・フーヘルの世界—その人生と作品』 鳥影社 東京 2016年 43頁
- 4) Hub Nijssen: *Der heimliche König. Leben und Werk von Peter Huchel*. Verlag Königshausen & Neuman GmbH, Würzburg 1998, 323頁
- 5) Rino Sanders: *Chausseen Chausseen*. In: *Über Peter Huchel*. Hrsg.v.Hans Mayer, Suhrkamp Verlag, Frankfurt am Main 1973, 34頁
- 6) Hubert Ohl: *Peter Huchel: Das lyrische Werk im Spiegel seiner Titelgedichte*. In: *Peter Huchel*. Hrsg. V. Axel Vieregge, Suhrkamp Verlag, Frankfurt am Main 1986, 132頁
- 7) Rudolf Hartung: *Keiner weiß das Geheimnis. Zum jüngsten Gedichtband von Peter Huchel*. ebd. 200頁

第2章

『返答なし』1972年初出

Keine Antwort

霧をまとう柏のおぼろな

樹冠に

カラスがとまる。

締梁はうつろ。

干からびて

からみあったぶどうの蔓の影

天井の。

しるし
徴、

ひとりの中国の高官の手によって

書かれた。

おまえの所有する

アルファベットは

十分ではない、

無防備な文字に

返答するには。

Aufs schwimmende Nebelhaupt

der Eiche

setzt sich die Krähe.

Der Katzenbalken ist leer.

Schatten von dürren

Weingerank

an der Zimmerdecke.

Zeichen,

von eines Mandarinen Hand

geschrieben.

Das Alphabet,
das du besitzt,
reicht nicht aus,
Antwort zu geben
der wehrlosen Schrift. (GW I, S.204)

『返答なし』は、『返答』と同様詩集『余命』の第4部の2番目に出てくる作品である。この二つの詩が対になっているのはタイトルから知れる。第1連に出てくるカラスは、フーヘルの場合死者の鳥、不吉な告知者、ギリシア神話のアリステアス（詩『アリステアス』(GW I, S.233)で「わたしはアリステアス／カラスとなって神に従い／夢に引きずられ／さまよい舞う」と謳われた）、死ぬこともできるがふたたび死者たちから帰ってくることのできる黄泉の国の使者である¹⁾。死の象徴としてのカラスは、死を明確に意識した詩集のタイトル『余命』と通じている。締梁は原文では Katzenbalken である。ここに Katze が出てくるのは、おそらく猫好きのフーヘルにとって意味深いものがあるはずだ。フーヘルは自宅にいつも数匹の猫を飼っていて、自身「わたしは猫を引きつける」²⁾と言っていた。その猫がいまはいないことで不吉な死の影はさらに濃くなる。

第2連の最初の3行は、初期の詩『バルトーク』のなかの「日をあびた木摺の上の果物が干からびる／あの老人だけが死んで消えていった」(GW I, S.56)を思い出させる。『バルトーク』では、代替可能な労働力としての作男バルトークの死が、共産主義的な思想を背景に描かれているが、この詩ではすべてが衰退、滅亡してゆく徴をおびている。

5行目の「中国の高官」は、明朝、清朝時代の厳しい試験の科挙に受かって出世した行政顧問の高級官吏である。その高官は、抜きんでた教養を身につけ

ていたにちがいない。高官は、かつて徴を書いてそれを解説できた。その姿は、フーヘルに通じる。フーヘルもまた高い教養をもって文学雑誌『意味と形式』の編集長を務めていたからである。フーヘルは、かつて自然から徴を読み取るすべを知っていて、西洋の文学的伝統を知悉していた自分をこの高級官僚に仮託している。

しかしつづく第3連では詩的自我をおまえと呼んで、「無防備な文字」（自然の徴）に応答することができない。とはいえここでも『返答』と同様完全に徴の解説を絶たれているわけではない。「十分ではない」からだ。トーマス・ゲッツはそれを、「この詩では言葉への懐疑があきらかだが、抒情的自我は、ある程度の言葉の管轄権をもっている」³⁾と言っている。この詩では、『返答』よりもさらに一歩進んで言葉への懐疑と沈黙が問題となっている。フーヘルは、ある講演で「書く者はだれでも、沈黙から言葉を引き出すことがいかにむずかしいか知っている」（GW II, S.332）と述べている。フーヘルにとって沈黙は、詩作の根底を揺るがす後半生のもっとも重要な問題である。彼は、かつてアルファベットの知識をもっていて、すなわち自然の徴を解説する言葉の権能をもっていたが、いまはそれを十分に使いこなすことができない。アルファベットの不完全さへの洞察は、後期のフーヘルの深い絶望から生まれた「脱魔法化」の結果である。この問題はさらにフーヘルに言葉の不可能性への諦念を呼び起こす。詩集『余命』の詩『月のきらめく鍬のしたで』*Unter der blanken Hacke des Mondes* (GW I, S.211) の第1連ではアルファベットはこのように記述される。

月のきらめく鍬のしたで
わたしは死ぬだろう、
稲妻のアルファベットを
学びとることなく。

夜の透かし模様のなかに
解説されない
神話の幼年時代。

知らずに
わたしは墜ちていき、
きつねたちの骨のそばへ投げすてられる。

この詩は、1972年の“Merkur 26”が初出である。ここではすでに自然の徴であるアルファベットを解説することができない。言葉の不可能性はフーヘルに沈黙を強いる。この諦念は、しかも死と結びついている。第3連で詩人を威嚇し、迫害し、最後は死にいたらしめる敵対者⁴⁾であるキツネのそばに投げすてられて死ぬ運命を予感しているからである。この詩では、沈黙と同時に実存の危機があらわれていると言ってよいだろう。フーヘルにとって後年の詩は、この実存の危機と言葉の不可能性のまわりをめぐる展開されている。

詩『返答なし』を形式面から見ると、まず言葉の寡黙さに気づく。1行の単語数は、『返答』よりもさらにすくなく1語～4語である。1単語の行も2か所ある。これにより『返答』と同様形式の緊縮化・集中化をもたらされている。アンジャンプマンも頻出し、意識の凝滞をもたらしている。『返答』で挙げた語句と構文上の特性、すなわち定動詞の減少（第2連にはひとつも定動詞がない）、比較のwieの消失、1行の長さの短縮、複合語の意外な組み合わせ（霧の樹冠 Nebelhaupt は美しい形象であるが、意外さをも呼びおこす）、規則的な韻律の解体、形容詞の簡素化（3度しかもちいられていない）、物語性の欠如、単語数の減少等は同様に見られる。また Krähe と Katzenbalken は頭韻を踏んでいる。

このようにこの詩では言葉はより寡黙になり、詩人が自然の徴を解説する能力はほとんど消滅している。死の影にまともわれて、言葉は少なくなり、やがて

徴を理解できない沈黙へと移行する。この「世界状況」を理解できない過程で詩『返答なし』は、『返答』よりもさらに過激にコミュニケーションの杜絶を示唆しているのである。

註

- 1) Axel Viereg: *Peter Huchels Lyrik*. In: *Peter Huchel* Hrsg. V. Axel Viereg, Suhrkamp Verlag, Frankfurt am Main 1986, 73 頁
- 2) Monica Huchel: *Fürst Myschkin. Peter Huchel und seine Katzen*. Schöffling & Co. Verlagsbuchhandlung GmbH, Frankfurt am Main 2014, 52 頁
- 3) Thomas Götz: *Die brüchge Idylle. Peter Huchels Lyrik zwischen Magie und Entzauberung*. ebd. 99 頁
- 4) 参照：齊藤寿雄：『ペーター・フーヘルの世界—その人生と作品』 鳥影社 東京 2016 年 197 頁

第3章

『トトモース』 *Todtmoos*

トトモースで

わたしは白くかがやく雪の大気のなかに

雪を摘みとるものたちが飛んでいるのを見た。

わたしは綿のように落ちてくるものに手をのばしたが

つかまえたのは冷気だけ。

岩壁に雪の癍痕、

いずこへの道しるべか。文字、

解読されない。

In *Todtmoos*

sah ich in weißer leuchtender Schneeluft
schneepflückende Wesen fliegen.
Ich griff in den Flockenfall
und fing nur Kälte.

Schneenarben an den Felsen,
Wegzeichen wohin? Schriftzeichen,
nicht zu entziffern. (GW I. S.258)

この詩は、初出はフーヘル最後の詩集『第9時』（1979年刊）で、この詩集の最後から2番目に置かれている。この詩集の最後の4篇の詩は、全集Iの註（GW I, S.433）によると1977年10月末から11月半ばに書かれた。フーヘルは1981年に亡くなったが、これらの詩以降作品を発表していないから、それは文字通り死期を覚悟した詩人が最後に残した遺言である。

トトモースは、ドイツ南西部シュヴァルツヴァルトの標高700メートル以上の高地に位置する町である。フーヘルは、1971年に東ドイツを出国した後、1972年にフライブルク近郊のシュタウフェン・イン・ブライスガウに移住した。彼は、この終の棲家に住む間にトトモースを訪れたことがあるのだろう。

晩年の詩に特徴的なように、この詩も全部で30語の短い詩である。この短い詩のなかに3度「雪」Schneeが出てくる。フーヘルは、すでに述べたように晩秋から初冬にかけてトトモースを訪れているから雪の降る景色を見ているはずである。

白く輝く大気なかで彼はなにを見たのだろう。「雪を摘みとるもの」は「落ちてくる雪」である。この「もの」Wesenは、綿のような実態をもったものであるが、しかしフーヘルはそれを捉えられない。手にするものは冷気だけである。それは、フーヘルがもはや人生のなかで確実な「もの」をうしない、虚空に徒勞の手を伸ばすことしかできないことを意味している。

雪はフーヘルにとって重要な自然の要素である。とくに雪が登場する場面は、詩人の絶望的な心情が実存的に暗示される。詩『冬の詩篇』 *Winterpsalm* (GW I. S.154 f) の第1連と第4連はこう描かれている。

わたしが空のものうい冷たさのなかを、
 通りをくだり川岸までくと、
 雪のなかに窪地がみえた、
 そこは風が夜
 肩をやすめてうづくまるところ。

わたしは橋の上に立っていた、
 ひとり空のものうい冷たさをまえにして。
 いまなおかほそく息をしているのだろうか、
 葦ののどをとおして、
 凍てついた川は¹⁾。

「雪の癍痕」は自然のなかの徴である。しかしそれがなにを意味しているか詩人にはわからない。自分がどこに向かってゆくのかわからない。「道しるべ」 Wegzeichen と「文字」 Schriftzeichen がともに「Zeichen」(徴)を含みながら、「徴は解釈できない」²⁾。彼の向かう先は闇である。全集のこの詩の註には、当初の原稿では第2連はこう書かれていた。「Schneearben an den Felsen/Wegzeichen wohin?/ Eine Schrift/ nicht zu entziffern」。ここでは Schriftzeichen の代わりに Schrift だけがかかわれている。これを決定稿では Schriftzeichen として Zeichen を組み合わせたのは、この Zeichen が大きな意味をもっていることを明かしている。「徴」を2度登場させることによって、

自然界の徴がもはや彼には解読できないことを読者に強く意識させる。すなわち人生の終焉につき当たって、自然から「世界状況」を学んできた彼は、その徴をもはや見いだすことはできない。この人生の終末で、諦念と絶望と徒労が彼を支配する。

形式的に見ると、先の『返答』と『返答なし』と同様、合成語が随所に見られる。Schneeluft、schneepflückende、Flockenfall、Schneearben、Wegzeichen、Schriftzeichen。一語形容詞があるが、あとは名詞の合成語である。これは言葉の緊密化をうながすばかりでなく、言葉の組み合わせによって意外な効果をもたらす（Wegzeichen と Schriftzeichen は辞書に載っているが、これは Zeichen を強調するためと考えられる）。

また第1連には定動詞が3回出てくる（sah, griff, fing）が、第2連には定動詞がない。第1連は物語性はあるが、第2連でそれが杜絶されことで、断片としての言葉の一つひとつが独自の存在感をもって語り出る。言葉の寡黙化、縮小化は、フーヘル晩年の作品を特徴づけるメルクマールだが、それは最終的に言葉が沈黙へ向かうことを意味する。人生の終焉にあって詩人はもはや言葉をあやつれない。自然のなかの徴を見極めることができない。フーヘルの人としての人生は、ここでついでるのである。この『トトモース』は、もはや詩を書くことのできなくなった詩人の詩作との決別をあらわしている。

註

- 1) 参照：齊藤寿雄『ペーター・フーヘルの世界 その人生と作品』鳥影社 東京 2016年 152-160頁
- 2) Michael Gratz: *Der Fremde geht davon. Peter Huchels letztes Jahrzehnt*, In: *Peter Huchel. Leben und Werke in Texten und Bildern*, Hrsg.v. Peter Walter, Insel Verlag Frankfurt am Main und Leipzig, 1996, 303頁

VO 構造を主語とする中国語形容詞述語文

伊 藤 大 輔

0. はじめに

刘月华等 2019: 601 は、以下の(1)～(3)のように形容詞述語文の主語に VO 構造が現れる例は、一部の VO 構造に限られるとしている。

- (1) 说话很快 話し方が速い¹
- (2) 走路很慢 歩くのが遅い
- (3) 睡觉很早 寝るのが早い

そして、これらはいずれもそれぞれ以下の(4)～(6)のようないわゆる様態補語を用いた言い方に改めることが可能であるという。

- (4) 说话说得很快 話し方が速い
- (5) 走路走得很慢 歩くのが遅い
- (6) 睡觉睡得很早 寝るのが早い

すなわち、(4)～(6)のような様態補語を用いた構造が広く生産性を持つのに対し、(1)～(3)のような例は一部に限られた例外的なものとして位置付けられている。

一方、以下の(7)～(9)を(1)～(3)と比較されたい。

¹ 以下、用例の日本語訳はすべて引用者による。

- | | |
|----------------------|---------------|
| (7) 做人很难 | 人として生きることは難しい |
| (8) 开车很危险 | 車の運転は危険だ |
| (9) 教书不容易 (朱德熙 1982) | 勉強を教えるのは大変だ |

(7)～(9)は、一見(1)～(3)と同様に形容詞述語文の主語に VO 構造が現れた例であるが、それにもかかわらず、一般に例外的な扱いは受けない。このことは、VO 構造を主語とする形容詞述語文の内部が一様ではなく、少なくとも(1)～(3)と(7)～(9)とはそれぞれ異なる下位範疇として区分され得る、ということを示唆する。

ここで、(1)～(3)や(7)～(9)に代表されるような、VO 構造を主語とする形容詞述語文を VO 形容詞文と総称することにする。小論は、VO 形容詞文の諸例を下位範疇に分類し、それらの下位範疇同士の間にはどのような関係が成り立つかということを考察するものである。以下、第 1 節では研究の方法および対象について詳説する。第 2 節では、VO 形容詞文が概ね性質を表す 1 群、方式を表す 2 群、原因を表す 3 群および目的を表す 4 群の 4 類型に分けられることを主張し、各類型の特徴を記述する。第 3 節では、1 群と 2 群、2 群と 3 群および 1 群と 4 群の間にそれぞれ連続性があることについて詳述する。第 4 節では、第 3 節における議論を総括し、1 群から 3 群に至る連続体が恒常と偶発、普遍と個別、“指称性主語”と“陈述性主語”をそれぞれ両極とし、4 群はその連続体とは別の軸で 1 群と連続しているということを図式化する。

1. 研究の方法および対象

今回は、北京语言大学 BCC 语料库²においてタグを活用し、“v n 很 a”（すなわち「動詞 名詞 “很” 形容詞」の配列）を検索³してヒットした例より、「動詞 + 名詞」が VO 構造として 1 つの構成素をなし、かつそれが「“很” + 形容詞」

² <http://bcc.blcu.edu.cn/>

³ 今回は検索対象とするジャンルを“文学”に限定した。

を述語とする構造の主語であると解釈し得る、すなわち VO 形容詞文に該当する例を抽出した。

なお、該当例としては、「動詞 名詞“很” 形容詞」のみで完全な VO 形容詞文を構成する例だけでなく、動詞や形容詞が前後の要素と共に構成素をなす例もカウントした。「動詞 名詞“很” 形容詞」としてヒットした部分を下線で示す。(11)や(12)のように、形態素解析やタグ付けが適切でないケースも、下線部の前後を確認した上で VO 形容詞文と認められる例はカウントした。

- (10) 我一直觉得 [给孩子们写东西] [很快乐]。(冰心《冰心全集第七卷》)
子どものためにもものを書くのは楽しいとずっと思っていた。
- (11) [爬上断桥] [很吃力], 他们把桥面的沥青残余敲掉了, 只剩下空架子, 上面架设了一条小铁路, 大概是用来运走瓦砾的。(亨利希·伯尔《岸上》)
壊れた橋に登るのは骨が折れる。橋に残ったアスファルトは落とされていて、骨組みだけが残っていた。鉄道が敷かれていたが瓦礫を運ぶためのものだろう。
- (12) 如果说 [戏弄獐] [很好玩], 那么狒狒则会被激怒。(乔伊·亚当森《生而自由》)
マンガースをからかうのがおもしろい体験だとするならば、ヒヒの場合は激怒してしまい困るだろう。

技術的問題と思われる原因により完全に同一の例が2件ヒットしている場合は1件とカウントし直した。また、既に見た通り形態素解析やタグ付けに問題があるケースもある。今回のデータはそういった誤差を含んでいるということをあらかじめ注記しておく。

今回ヒットした延べ例数 1572、異なり例数 1400 からなる「動詞 名詞“很” 形容詞」より、上記の方法で抽出された延べ例数 309 の VO 形容詞文が今回の研究対象である。

2. 調査結果

2.1. 統計データ

今回の研究対象である 309 例は表 1 のように下位分類される。各群の詳細は 2.2 を参照されたい。「その他」および「“离”“离开”」は後述するように例外的なので、それらを除外した数値も提示しておく。

表 1：今回収集された VO 形容詞文の内訳

	1 群 (性質)	2 群 (方式)	3 群 (原因)	4 群 (目的)	その他	“离” “离开” ⁴	計
用例数 (%)	81 (26.2)	50 (16.2)	10 (3.2)	10 (3.2)	10 (3.2)	148 (47.9)	309 (100)
用例数 (%)	81 (53.6)	50 (33.1)	10 (6.6)	10 (6.6)			151 (100)

2.2. 各群の詳細

2.2.1. 性質

今回収集された VO 形容詞文の用例のうち最も数量が多かったのは、VO が表す行為が具える恒常的な性質を述べるタイプである。まとめて 1 群と称することにする。

- (13) 鲁迅说, 改造传统很艰难, 而禁止青年人却很容易。(余秋雨《笔墨祭》)
鲁迅が言うには、伝統を改めるのは困難だが、青年たちのやることを禁止するのはたやすい。
- (14) 面对手枪很可怕, 你一刻都不能放松。(林语堂《风声鹤唳》)
銃に相対するのは恐ろしい。一瞬も油断することができない。
- (15) 我相信自然的力量, 崇拜太阳很合理, 崇拜不可捉摸的神则不然。(米涅·渥特丝《女雕刻家》)

⁴ 2.2.5 で触れる“离开厨房很久”に類する、「…を離れてから長いこと経つ」という意味を表す“离开”の例は除く。

私は自然の力を信じる。太陽を崇拜するのは合理的だが、掴みどころのない神は違う。

ただし、恒常的性質の内部は一様でなく、上記の例のように特定の条件に左右されない、いわば普遍的事実を表す例もあるが、VO の行為に関わる人、時間、場所などの特定の条件下でのみ成り立つ性質を表す例もある。以下の例はいずれも 1 群にカウントしたが、VO の V が主語や修飾語を伴うことにより、それぞれどのような条件下でその性質が成り立つかが示されている。条件が増えるほど特殊で個別的な性質となり、逆に普遍性はその分必然的に低減する。

- (16) 可现在的问题是，这些诗人出书很困难！（路遥《平凡的世界》）

だが今問題なのは、これらの詩人が本を出すのが困難だということだ。

- (17) 在岛上时对她讲真心话很容易，但现在他们之间有了一层隔膜。（约翰·丹顿《达尔文的阴谋》）

島では彼女に本音を話すのが簡単だったが、今は彼らの間に隔たりが生まれている。

- (18) 你这些新材料很有用，不过这种事儿，你热心为群众解决问题很好，不过，小平，记住，我们事事都要以诚相见，你刚才不该对李大妈耍这种小花招儿！（老舍《全家福》）

君の新しい情報は役に立つが、この手のことはだね、熱心に民衆のために問題解決を図るのはいいことだが、平くん、いいかね、何でも誠意を持って対応しなきゃだめだ。さっきは李さんにそんな小細工をするべきではなかった。

2.2.2. 方式

次に多かったのは、VO が表す動作行為が行われる方式を述べるタイプである。まとめて 2 群と称することにする。

1群の諸例が表す恒常的性質には、既述の通りそれが無条件で成立する場合と条件付きで成立する場合の両方があった。それに対し、2群の諸例が表す方式とはある行為の特定の条件下におけるあり方を指し、無条件では存在し得ないものである。その帰結として、2群の諸例においては、特定の条件、多くは動作行為の主体が文中に明示されているか、もしくは文脈から明らかである。統語論的には、行為の主体を表す要素を主語、VO形容詞文を述語とする主述述語文と捉えることが可能である。

- (19) 原来那局长到局很迟，好容易来了，还不就见，接见时口风比装食品的洋铁罐还紧，不但不肯作保，并且怀疑他们是骗子，两个指头拈着李梅亭的片子仿佛是捡的垃圾，眼睛瞟着片子上的字说：（钱钟书《围城》）
 そもそも局長は局に来るのが遅くて、やっと来たと思ったらすぐに会いもしない。面会時には食べものの缶詰よりも硬く口を閉ざし、保証人になることを承諾しないばかりか、彼らを詐欺師と疑っている。2本の指で李梅亭の名刺をまるでゴミでも拾ったかのようにつまみ、名刺の文字を眺めながら言った。
- (20) 我待百姓很好，他们也喜欢我；（弗兰克・鲍姆《绿野仙踪》）
 私は民衆に親切だし、彼らも私のことが好きだ。
- (21) 这种药水治伤口很灵验。（契诃夫《艺术家的妻子》）
 この薬は傷を治すのによく効く。

2群では、上記の例のように恒常的な事実を述べる例が多数を占めるが、その他に偶発的な出来事を述べる少数の例が存在する。

- (22) 爸哆嗦的很厉害，出入气很粗，可是他要上墙去看。（老舍《牛天赐传》）
 父はひどく震え、息も荒かったが、それでも塀に上って見に行こうとした。

- (23) 感动人, 并且似乎感动人很深的, 不是演辞的前一部分; (朱自清《语文零拾》)

人を感動させた、それも深く感動させたのは、どうやら演説の前半ではなかった。

- (24) 他取得权力很突然, 这发生在公司历史上一个困难危急的时刻。(阿瑟·黑利《烈药自清》)

彼は突然権力を掌握したが、それは会社の歴史上最も危機的な時期に起きた。

(22)～(24)の下線部は、いずれも1度限りの偶発的な出来事を表しており、この点において動詞述語文に類似した役割を果たしている。こうした例は1群には見当たらない。

2.2.3. 原因

1群と2群のどちらとも一線を画する例として、形容詞が表す状態の原因をVOが表すというパターンが挙げられる。まとめて3群と称することにする。

- (25) 爹爹见信很恼火。(杨绛《我们仨》)

父は手紙を見て腹を立てた。

- (26) 她殷勤而庄严地微笑着, 说她看到客人很高兴, 很幸福, 道歉说她丈夫和她这回不能够邀请军官先生们在这里过夜。(契诃夫《吻》)

彼女は優しくながらも厳粛な顔で微笑み、客にお会いできて嬉しく幸せだと伝え、また彼女の夫と彼女が軍官殿を今夜ここにお招きできないことを謝った。

- (27) 沿街看看橱窗很惬意。(海明威《尼克·亚当斯故事集》)

道すがらショーウインドウ見たりするのも心地よい。

これらは、「VO することが原因で形容詞の状態がもたらされる」という意味を表す点で共通する。見つかった例の多くは形容詞が心理または生理を表す。また、1 群や 2 群と異なり特徴的なのは、1 度限りの偶発的な出来事を表す例が大半であるという点である。

3 群のうち、心理や生理以外を表す形容詞が用いられた以下の例は、形容詞が VO の表す行為の方式を述べているとも捉え得る。よって、これらは 2 群の性質も兼ね備えていると考えることが可能である。

(28) 她觉得带刀很气派。(王小波《黄金时代》)

ナイフを身につけて風格があると彼女は感じた。

(29) 她戴耳坠很漂亮。(奥尔罕·帕慕克《纯真博物馆》)

彼女はイヤリングを付けてきれいだ。

(30) 葛龙德喝醉酒很荒唐、很任性——(温赛特《克丽丝汀的一生(下)》)

グロンドは酔っ払うとわがままでやりたい放題だ。

それぞれ、「ナイフを手にするによって風格が出る」「イヤリングを付けることによって美しくなる」「酒を飲むことによってわがままでやりたい放題になる」と解釈し得る一方、「ナイフの持ち方に風格がある」「イヤリングの付け方が美しい」「酒の飲み方がわがままでやりたい放題だ」とも解釈し得る。

2.2.4. 目的

さらに、上記のいずれとも一線を画する例として、VO の表す行為がある行為の目的を表すパターンが挙げられる。まとめて 4 群と称することにする。

(31) 住在青岛，看海很方便。(老舍《蛤藻集》)

青島に住むと、海を見るのに好都合だ。

(32) “木鞋子又怎么了？很漂亮嘛。”“在乡村穿着吃午宴很好，可在城市就

太随便了。”(西蒙娜·德·波伏娃《名士风流》)

「木靴はどうしたの？ 素敵なのに。」「田舎で昼食会のときに履くのはいいけれど、都会ではラフすぎる。」

- (33) 牛糞上捉到的黄苍蝇钓鱼很棒。(乔治·奥威尔《上来透口气》)

牛の糞の上から捕まえたミカンコバエはヒラウオを釣るのによい。

4群に用いられる形容詞は上記の“方便”“好”および“棒”にほぼ限られ、全体で概ね「ある対象または状況がVOを遂行する目的を果たす上で好都合である」という意味を表す。たとえば、(31)は一見1群のようでもあるが、「海を見ることが好都合だ」というよりも、むしろ「青島に住むことが海を見るために好都合だ」と捉えるのが妥当である。よって、これを1群と区別するため新たに4群を打ち立てる。(32)(33)も同様にそれぞれ「木靴は昼食会のときに履くのに相応しい」「ミカンコバエは餌として適当だ」と解釈するべきである。

なお、以下の例は例外的に形容詞が“年轻”“老成”であり、(31)～(33)と若干趣を異にするが、目的を表すという点は共通しているため、4群に含めることが可能である。

- (34) 一个人也许论年岁很年轻，可是论时数很老成——假如他不曾浪费光阴的话。(弗朗西斯·培根《培根论说文集》)

ある人は年齢が若い、重ねた時の量において成熟しているかもしれない。その人が時間を浪費していなければ。

ここで“论年岁”がある行為の目的を表していると述べるのは一見飛躍のように思われるかもしれないが、Sweetser 1990 に則って次のように説明することが可能である。(31)～(33)における目的が内容(content)領域における目的なのに対し、(34)の目的は「年齢を述べるという目的を達成するために若いと判断する、あるいは言う」という認識(epistemic modality)領域または発話行

為 (speech acts) 領域における目的だという説明が可能である。“论时数很老成”についても同様である。

2.2.5. その他

以下のような形容詞が“很久”またはそれと同義の“很长时间”からなる例が10例あったが、これらは上記のタイプのいずれかに当てはめることが困難である。かつ、“很久”“很长时间”以外の形容詞を用いた類例を想定することも困難なので、今回は例外として議論の対象から除外する。

- (35) 那时候厨师已经离开厨房很久了，厨师也已经吃饱喝足。(余华《世事如烟》)

そのときコックは厨房を離れて長いこと経っており、既にたらふく食べて飲んでいました。

2.2.6. “离”について

今回の調査では、以下のような“离”が用いられた例が大量に収集された。“离”は《现代汉语词典（第7版）》および《现代汉语八百词（增订本）》のいずれにおいても動詞とされている。よって、これらもVO形容詞文について議論する上で避けて通れない。ただし、数量が上記の1～4群のいずれよりもはるかに多いという点において、これらもまた例外的である。

- (36) 有一天我们出去散步，走着走着，直到我们离船很远。(冰心《冰心全集第五卷》)

ある日散歩に出掛けたら、歩いているうちに船から遠ざかっていた。

- (37) 他们的寓所离公园很近，不过一会儿的工夫他就到了那里。(巴金《爱情的三部曲（雾雨电）》)

彼らの住まいは公園から近く、ほどなくしてそこに着いた。

(38) 这儿离地委很近，我回家去住一晚上。(路遥《平凡的世界》)

ここは地区委員会から近いので、私は家に帰って一晩寝ます。

今回見つけた“离”の例で用いられた形容詞はほぼすべてが“远”または“近”のいずれかであるが、唯一の例外をここに記しておく。

(39) 大船因为搁浅而离水面很高，我双臂可以够到的地方，没有任何可以抓住的东西。(丹尼尔·笛福《鲁滨逊漂流》)

船は座礁したので水面から高く、僕の両腕が届くところには捕まえられるものが何もなかった。

以下のような“离开”の例も、“离”の例に準じるものとして扱われるべきであろう。

(40) 你的王国从此繁荣昌盛，你也可以活到老年，在一个离开大海很远的地方离开世间。(古斯塔夫·施瓦布《希腊神话：奥德修斯的故事》)

あなたの王国はこれから隆盛を極め、あなたはまた長生きして、海から遠いところで世間から離れて暮らすことができます。

(41) 我离开村庄很远，摸黑回到村子需要费时间。(欧文·华莱士《三海妖》)

村から遠く離れてしまったので、暗闇の中手探りで村に帰るには時間がかかる。

3. 考察

3.1. 1群と2群の関係

1群と2群の違いは、それぞれ前者が普遍的、後者が個別的な意味をそれぞれ表す傾向にあるという点に集約される。1群と2群の例を(42)と(43)にそれぞれ再掲する。

- (42) 改造传统很艰难 伝統を変える {の/こと} は難しい
 (43) 局长到局很迟 局長は局に着く {の/*こと} が遅い

日本語訳に注目されたい。一般に、1群の諸例はVOを「OをVすること」と訳しやすいのに対し、2群の諸例はそれが困難である。久野1973:140は、「動詞の目的節をマークする形式」のうち、「こと(を)」と「の(を)」とを比較し、両者の違いを「前者が、抽象化された概念を表すのに対して、後者が、五感によって直接体験される具体的動作、状態、出来事を表すこと」としている。ここにある「抽象化された概念」と「具体的動作、状態、出来事」との対立は、小論が掲げる普遍的性質と個別的方式との対立と基本的に合致するものであり、1群と2群とを隔てる本質的差異である。

冒頭で触れた(1)~(3)と(7)~(9)との違いについては、前者が2群、後者が1群にそれぞれ属すると捉えることにより合理的に説明され得る。(1)の“说话很快”は、フレーズとして成り立っているが、場面・文脈の支えなしで完全なセンテンスになり得るとは言い難い。このことは、2群が個別的な動作行為の方式を表す上で、必ずそれが成り立つための条件の提示を要求することの帰結であると考えることができる。“说话很快”は、たとえば“小王说话很快。”のようにある特定の人物について成り立つという条件が示されて初めて完全なセンテンスとなるのである。それに対し、(7)の“做人很难”はそれ自体で“做人很难。”という完全なセンテンスになり得る。

一方、1群と2群の内部はいずれも一様ではなく、普遍的か個別的かは程度の問題である。2.2.1において、1群の諸例の普遍性に程度の差があることを既に見た。文中の要素によりその性質がどのような条件下でのみ成り立つか限定された場合は、普遍的事実よりもやや個別的な事象に近いものとなる。一方、2群の諸例が表す動作・行為の方式とは、常に条件付きで成立するものであった。以上の事実は、1群と2群との境界が連続的であることを示唆している。

- (44) 方家生孩子很费力，娶了十几房老婆，好不容易才生了两个。(张炜《你在高原》)

方家は子どもを産むのに苦労していて、嫁を10人以上娶っても2人しか生まれなかった。

この例は、偶発的な出来事ではなく恒常的な性質を述べているという事実に基づいて1群に分類したが、その一方で普遍的事実を述べているわけではなく、「方家」という特定の範囲に限られたことを述べているという意味では個別的事実である。以上のような意味的特性より、(44)は1群と2群の境界的な位置を占める例と言える。なお、統語論的には、IC分析が(45)のようになされれば1群ということになるが、(46)のようになされれば2群ということになる。この場合はいずれの解釈を取っても意味的な差異は極めて軽微である。

(45) [方家生孩子][很费力] 方家が子どもを産むことは困難である

(46) [方家][[生孩子][很费力]] 方家は子どもを産むのが困難である

1群と2群の間に成り立つ関係をまとめると以下の通りである。基本的に、1群は普遍的、2群は個別的な意味にそれぞれ傾いているが、1群のうち普遍的な事実ではなく一定の個別性を具えた意味を表すような例を間に介しつつ、両者は連続している。

3.2. 2群と3群の関係

2群と3群の違いは、前者が動作行為の方式を表すのに対し、後者は偶発的な出来事を表すという点に集約される。言い換えれば、前者が「どんなだ」を述べる形容詞述語文らしい性質を持つのに対し、後者は形容詞述語文でありながら「何が起きた」を述べる動詞述語文に準じる性格を持つ。これまで、VO形容詞文のVOと形容詞との間に主述の関係が成り立つということを暗黙の前

提として議論を進めてきたが、仮に「主語」というものがプロトタイプカテゴリーであるとする、3群のVOは典型的な主語との間に距離があり、「主語らしさ」は1群や2群のVOと比べて低い。以下の3群の例では、VOのVが重ね型になっており、VOは主語というよりは述語動詞として働いているように見える。オーソドックスな理論的枠組みにおいては、“[看看橱窗][很惬意]”は主述構造ではなく、連動構造や修飾構造と分析されることも十分にあり得る。

(47) 看看橱窗很惬意

さらに、3群においては、VOのVの直後にアスペクト助詞“了”を加えることが容易である。この点も、3群におけるVOの「主語らしくなさ」の現れである。

以上のように、2群と3群の間には明確な差異がある。しかし、同時に1群と2群の間に見られたのと同じような連続性を認めることが可能である。2.2.2では、2群の一部に偶発的な出来事を表す例が存在することを確認した。一方2.2.3では、3群の例の大半が偶発的な出来事を表すということを指摘した。この共通点より、2群の一部が3群に接近しているということが予測される。

まず、2群のうち偶発的な出来事を表す例を再掲する。

(48) 出入气很粗

(49) 感动人很深

(50) 取得权力很突然

次に、3群のうち形容詞がVOの表す動作行為の方式を述べていると解釈し得る例を再掲する。

(51) 带刀很气派

(52) 戴耳坠很漂亮

(53) 喝醉酒很荒唐

(48)～(50)と(51)～(53)との違いは、前者においては形容詞が動作行為の方式を表すとしてしか捉え得ないのに対し、後者においては形容詞が動作行為の方式を表すという解釈に加え、VOが形容詞の表す状態の原因を表すという解釈も可能であるという点である。すなわち、両者は偶発的な出来事である点だけでなく、形容詞が動作行為の方式を表すという点も共通しており、一定水準の類似性を呈している。2群の一部と3群の間にこのような類似性が見出されることは、両者が連続的である証拠であると考えることが可能である。(48)～(50)のような例が2群の中では少数であり、典型から離れているという点もそのことの裏付けとなり得る。

2群と3群の間に成り立つ関係をまとめると以下の通りである。典型的には、2群は動作行為の方式、3群は偶発的な出来事をそれぞれ表すが、2群のうち偶発的な出来事を表す例、また3群のうち動作行為の方式を表す例を間に介しつつ、両者は連続している。

3.3. 1群と4群の関係

3群と対照的に、4群の諸例はいずれも偶発的な出来事を表すことがなく、「VOするために」という現実化していない目的を述べるものである。そのため、4群は上で見た1群から2群、また2群から3群へと至る連続体とは別個に考えるべきである。

4群は、偶発的な出来事を表さないという点では1群と共通する。1群と4群との違いは、前者において形容詞による叙述の対象になっているのがVOの動作行為そのものであるのに対し、4群において形容詞が叙述の対象とするのはVOの動作行為ではなく別のある対象または状況であるという点にある。たとえば、1群“做人很难”において「難しい」のは「人として生きること」自

体であるが、4群“住在青島，看海很方便”において「好都合である」のは「海を見ること」ではなく「青島に住むこと」である。以上を踏まえると、1群のVOが難なく主語と捉え得るのに対し、4群のVOは主語というよりも形容詞の内容が真であるための条件を表す従属節に近いものと捉えるべきであるということが明らかになる。

では、1群と4群との間に、偶発的な出来事を表さないという以外に接点はないのであろうか。ここで注目したいのが、1群の例の中には“要”がVOに前置された例が見られるという事実である。

- (54) 他知道这样做是不合法的，但他也知道在美国要假造身份很容易，而且也很安全。（斯蒂芬・金《肖申克的救赎》）

彼はそうすることが違法だとわかっていたが、アメリカで身分を詐称するのは容易でかつ安全だということも知っていた。

一方、今回の調査で見つかった例ではないが、4群の中にも“要”が現れることがある。以下は、ある賃貸物件のロケーションを紹介する文脈で用いられた例である。

- (55) 离滨江宝龙骑车7分钟，离天街15分钟，要吃饭很方便。⁵

滨江宝龍まで自転車で7分、天街まで15分で、食事には困りません。

ここに、1群と4群の接点があると考えることができる。ここでは“要”が仮定条件のマーカールとして議論を進める。1群の中に、さまざまな条件下で限定的に成立する性質を表す例があり、条件が付くのに伴って普遍性が低減するという事は既に確認した。そのことは、“要”により仮定条件が追加

⁵ <https://weibo.com/5639001256/LxnvJbhSr> 以下 URL はいずれも 2022 年 10 月 26 日閲覧。

された例にも当てはまる。一方、“要假造身份很容易”において、“要假造身份”は主語と条件節の中間的なものとなっており⁶、その点で形容詞がVOを叙述の対象としない4群に接近した例であると言える。

1群と4群の間に成り立つ関係をまとめると以下の通りである。典型的には、1群は形容詞がVOを叙述の対象とするが、4群は形容詞がVO以外の別の対象または状況を叙述の対象とする。仮定条件を表すマーカー“要”が用いられた例を間に介しつつ、両者は連続している。

3.4. “离”の位置付け

2.2.6 で見た“离”または“离开”の例は、ここまでに見た分類の中では2群に帰属させることが可能である。

まず、意味論的には、「ある地点からの離れ具合すなわち距離が遠い/近い」という意味が“离”の諸例に共通している。「ある地点からの離れ具合」とは離れるという特定の条件下における事物の存在方式に他ならない。これは2群を特徴づける意味的特徴そのものである。

2群に分類した例の中に、“离”と対照的な意味をなす“靠”が用いられた例があったことを付記しておく。一見対照的な「離れ具合」と「近づき具合」とが事実上同義になる様が見て取れ、興味深い。

- (56) 他像泥瓦匠工头，浑身尘土仆仆，终于挑中了小树林的一块地方，那里靠厂子很近，原是旧社会打算给厂长盖洋房的，地基现成。(李国文《改选》)

彼は左官の親方のように全身ほこりまみれになり、ようやく小さな森の中のある土地を選び出した。そこは工場に近く、元々は旧社会の連

⁶ 長谷川 2009 は、話題が条件節からメタファーにより拡張され得るということを指摘している。話題と主語の関係についてここで深く立ち入る余裕はないが、ここで主語と呼んでいる“假造身份很容易”における“假造身份”を話題と捉え直しても不都合は生じない。

中が工場長に洋館を建てる予定だったところで、地盤ができていた。

同様に2群に分類した以下の“到”の例も、“离”に接近した例と言える。

- (57) 拉班走进到广场很远的地方，他急促地躲过呼呼驶过的车，从一块干地跳到另一块干地，扬着手撑着雨伞，以便能看清周围的一切。(卡夫卡《乡村婚礼的筹备》)

ラパンは広場から遠いあるところに入り、うなりを上げて通過する車を慌てて避け、乾いたところから別の乾いたところにジャンプし、手を掲げて傘をさし、周りのすべてを見ることができるようにした。

次に、統語論的に見ると、2群の例の大半は様態補語を用いた言い方に変換可能であるが(“说话很快”→“说话说得很快”)、“离”の用法として様態補語を用いた“离N离得…”というパターンが散見される。

- (58) 离家离得远，真的好吗？⁷

家から遠く離れて本当にいいの？

- (59) 还好天津离北京离得不算远。⁸

幸い天津は北京から遠く離れてはいない。

- (60) 而如果是离公司离得远，就必须很早起床。⁹

もしも会社から遠く離れていたら、必ず早起きしないとイケない。

以上のように、“离”の例は意味論的にも統語論的にも2群と共通点を持つ。よって、小論の分類においては2群の中に位置づけるのが妥当である。

⁷ https://k.sina.cn/article_6438205398_17fbf37d6001003c37.html

⁸ <https://sports.sina.com.cn/china/j/2020-03-13/doc-iimxyqwa0152357.shtml>

⁹ <https://www.jianshu.com/p/bd150d021801>

4. まとめ

これまでの議論を図1にまとめる。

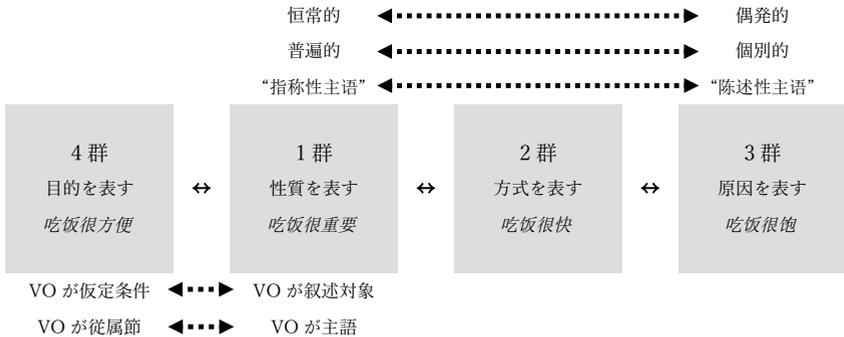


図1：VO形容詞文の諸類型とそれらの関係

既に見た通り、1群と2群、また2群と3群はそれぞれ連続的である。1群は、いずれも恒常的な性質を表すが、普遍的事実を表す例からある程度個別的な性質を表す例に至るまで幅がある。個別性が高い例ほど2群に接近したものと言える。2群は、いずれも個別的な方式を表すが、恒常的な性質を表す例から偶発的な出来事を表す例に至るまで幅がある。概ね前者が1群寄り、後者が3群寄りである。3群は基本的に1度限りの偶発的な出来事を表し、1群や2群と比較して動詞述語文的である。

“指称性主語”と“陈述性主語”についてはここで新たに補足する。朱德熙1982:101-102は、“干净最重要”における“干净”や“教书不容易”における“教书”を“指称性主語”とする一方、“干干净净的舒服”における“干干净净的”や“大一点儿好看”における“大一点儿”を“陈述性主語”とし、両者を区別している。“指称性主語”は、それを担う述詞が表す動作、行為、性質、状態等が事物化されたもの¹⁰であり、“指称”の対象である。それに対し、“陈述

¹⁰ この指摘は久野1973の「抽象化された概念」に通じるものである。

性主語”は動作、行為、性質、状態等を“陈述”するものである。形式的には、“指称性主語”を尋ねる際に“什么”が用いられるのに対し、“陈述性主語”を尋ねる際には“怎么样”が用いられるという点で区別される。吉田 2019 は、沈家煊 1995 による“有界”および“无界”の概念を援用し、“指称性主語”を担う述詞が“无界”、“陈述性主語”を担う述詞が“有界”であるのがそれぞれ無標の組み合わせであると結論づけている。

3.2 において、3 群の VO において、V を重ね型にすることや、VO にアスペクト助詞を加えることが容易であるという点を指摘した。こうした特徴は、基本的に“有界”の特徴と一致する。以上を根拠として 3 群の VO を“陈述性主語”に相当するものと位置付ければ、それと対照的な 1 群や 2 群の VO を“指称性主語”に相当するものと位置付け、両者を連続体の両極と解釈することもできる。

一方、4 群については 1 群から 3 群に至る連続体とは別個に考えた。意味的には、1 群の形容詞が VO を叙述の対象にするのに対し、4 群の形容詞は VO ではなく別のある対象または状況を叙述の対象とし、VO は仮定条件を表すのであった。それと並行する形で、形式的には 1 群の VO が典型的な主語と解釈され得るのに対し、4 群の VO はもはや主語とは言えず、条件を表す従属節と呼ぶべきものに近くなる。1 群と 4 群の接点には、仮定条件のマーカである“要”が用いられた例が存在する。

5. おわりに

今回は VO 形容詞文のみを研究対象としたが、これは一定時間内に観察できる用例数に限界があるために、検索範囲を限定する都合上そうした側面が大きい。本来 VO 形容詞文は、“学习很努力”“煮着吃好吃”といった、VO 以外の述詞が主語となる形容詞述語文と併せて総体的に論じられるべきものであるが、今回はそこまで手が回らなかった。今後の課題としたい。

なお、VO 形容詞文にまつわる言語外事実として無視できないのは、上で提

示した諸例からも窺われるように、海外作品の翻訳の例が大きな比率を占めたという事実である。この事実をどう解釈するかということも課題として残されることとなった。

参考文献

- 久野暁 1973. 『日本文法研究』。東京：大修館書店。
- 長谷川賢 2009. 「北京口語における条件文の周辺の用法」、『中国語学』256：106-121 頁。
- 吉田泰謙 2019. 《指称性主語和陈述性主語在有界无界上的对立》、『中国語学』266：156-173 頁。
- 刘勋宁 2006. 《“得”的性质及其后所带成分》、日中対照言語学会『中国語の補語』。東京：白帝社。
- 刘月华等 2019. 《实用现代汉语语法（第三版）》。北京：商务印书馆。
- 沈家煊 1995. 《“有界”与“无界”》、《中国语文》第5期：367-380 页。
- 王亚新 2006. 《状态补语“V得C”的语义与句法特征》、日中対照言語学会『中国語の補語』。東京：白帝社。
- 荀恩东、饶高琦、肖晓悦、臧娇娇 2016. 《大数据背景下 BCC 语料库的研制》、《语料库语言学》第1期：93-118 页。
- 朱德熙 1982. 《语法讲义》。北京：商务印书馆。
- Sweetser, E. 1990. *From Etymology to Pragmatics: Metaphorical and Cultural Aspects of Semantic Structure*. Cambridge: Cambridge University Press.

2020年東京オリンピック招致にかんする テレビ報道の共振性

井 美 奈 子¹

中 村 理²

1 研究目的と背景

2013年9月8日の早朝（日本時間）、ブエノスアイレスで行われた International Olympic Committee（以下、IOC）総会にて、2020年夏季オリンピック・パラリンピック³の開催地が東京に決定した。その前後の期間では、東京電力福島第一原子力発電所の汚染水漏れが問題になる中、日本招致団メンバーの意気込む表情や、「悲願の東京招致」へ向けたプレゼンテーションの様子がテレビに流れた。繰り返されるオリンピック招致への期待を込めた報道により、テレビでは日本全体が開催を待ち望んでいるかのような風潮が作られたのではなかろうか。その様子をふりかえり、内田（2014）は「無言の同調圧力を私は五輪招致という論件についても感じる」（p.13）と述べ、続けて「というようなことを書くと私はますます嫌われ、ますます孤立する」（p.13）とした。ここからは、招致に賛同しない者は周囲の意向を感じ取り、声を上げづらくなったことが想像される。

この状況は、Noelle-Neumann（1973）が「沈黙のらせん」として提起したものに符号する。Noelle-Neumann（1973）は、情報の受け手が自らを世論に

¹ 読売新聞東京本社政治部

² 早稲田大学政治経済学部

³ 実際の開催年は2021年である。これは2020年頃から全世界に広まった新型コロナウイルスの影響による。

おける少数派だと認知すると、孤立を恐れて口を閉ざし、多数派とされる意見がますます社会に顕在化するとした。そして、その過程を沈黙のらせんと称した。この仮説が重要な理由は、「人が何を世論とみなすか、つまり、〈世論の認知〉にマス・メディアが影響を及ぼすことによって、人々の意見や行動、現実の世論の将来を左右する」(田崎・児島 2003、p. 75) という帰結を予期するからである。この過程では、メディアがある争点に総体として特定の論調を示し、それが世論の多数派だと受け手に示唆することになる。つまり、メディア間で論調が似ることになる。Noelle-Neumann (1973) はそのような類似をメディアの共振性と呼んだ。

Noelle-Neumann and Mathes (1987) によると、メディアの共振性には実際には3つのレベルがあるという。1つ目は議題設定レベルである。これは、メディアがどの争点を選択して報道するか、を問うものである。このレベルはメディアの議題設定効果、つまり「何を考えるか」よりも「何について考えるか」という点で受け手に影響を与えること (McCombs and Shaw 1972) につながる。2つ目は焦点形成レベルである。これは、メディアがその争点のどのような側面 (すなわち下位争点) を取り上げて報道するか、を問うものである。3つ目は評価レベルである。これは、メディアがその争点・下位争点にどのような評価 (肯定・否定など) をくだすか、を問うものである。上にみたとおり、沈黙のらせんはメディアが評価レベルで共振することを前提にする。いずれのレベルであれ共振性があると、「特定の争点を報道する際に様々なメディアが論点や意見の点で同じ方向に傾き、受け手はその認識や判断が狭い範囲に限定され、意思形成にも制約が生まれる」(松葉・上田 2011、p. 87) ことになろう。

では、共振性についてこれまでどのような実証がおこなわれてきたのだろうか。メディアが類似の報道傾向をみせることについては、張 (2000) が挙げたように以前から複数の先行研究がある。しかし、それらには主に2つの難点があった。1つ目は、メディア間に類似性があったとした先行研究の多くが議題設定レベルないしは焦点形成レベルに相当するものを対象にしてきたことである

(阪口 2014)。2つ目は、国内の報道を扱ったものには共振性に乏しいという結果も存在(上滝 1989; 松尾 1990)し、実態に不明な点があったことである。

これらを受け、張(2000)は新聞とテレビ報道番組の共振性を3つのレベルに分けて検証した。対象としたのは新聞2紙(読売新聞、朝日新聞)、民放(日本テレビ、TBSテレビ、フジテレビ、テレビ朝日)4番組、そしてNHK1番組の計7つである。対象期間は1998年の参議院選挙に合わせて6月22日から7月12日の3週間とした。そして、この期間に次の4つの点がどうかであったかを調べた。すなわち、報道全般ではどういった争点(「政治」「経済」「社会」など)が報じられたか(議題設定レベル)、選挙に絞るとどういった争点(「経済問題」「医療改革」「年金制度改革」など)が報じられたか(議題設定レベル)、選挙の「経済問題」という争点においてどういった下位争点(「公共事業」「消費税の税率」「所得税と法人税の恒久減税」など)が報じられたか(焦点形成レベル)、選挙の「経済問題」のうち、「所得税と法人税の恒久減税」という下位争点がどう評価されたか(評価レベル)、である。その結果、張(2000)は議題設定レベルと焦点形成レベルにおいては共振性を見出した。一方で、評価レベルの検証は不十分に終わった。すなわち、張(2000)は「この結果はいろいろに解釈できるが、…(中略)…今回は、各メディアの評価パターンには明確な共振性は見られなかったと結論しておきたい」(張 2000、p. 142)と述べるにとどまった。

張(2000)の研究には改善の余地も3つある。1つ目は評価レベルを検証した下位争点の数である。張(2000)は「所得税と法人税の恒久減税」という下位争点1つのみを評価レベルの調査対象とした。だが、共振性の意義を考えると、ほかの下位争点でどうであったかも重要である。2つ目は争点および下位争点の抽出法である。張(2000)ではこの点が不明である。3つ目はコーディングの精度である。信頼性については言及がないので、検証しなかったものとみられる。また、コーディングについての説明がなく、どういったコード化をおこなったかが不明であるため、再現可能性に乏しい。

以上を受け、本研究は「2020年東京オリンピック招致」にかんするテレビ報道が番組間で共振していたかを、Noelle-Neumann and Mathes (1987) のいう3つのレベルに分けて量的に検証することを目的にする。議題設定レベルではテレビの報道番組が「2020年東京オリンピック招致」という争点にどれほど注目したのかをみる。焦点形成レベルでは、オリンピック招致の中でもどういった下位争点に各番組が力を入れたのかをみる。評価レベルでは、それらの下位争点を通じ、「2020年東京オリンピック招致」がポジティブに語られたのか、ネガティブに語られたのかをみる。分析には量的な内容分析を導入し、コーディング・マニュアルにもとづいたヒューマン・コーディングをおこなう。コーディングの信頼性はコーダーとの一致度によって見積もる。下位争点の抽出は体系的な方法によって客観化する。評価レベルの検証においては、複数の下位争点を用いて全体の傾向を明らかにする。

本研究ではさらに、テレビ番組を分析対象とする点を活かし、音声言語以外の要素をマルチモードとして導入する。具体的には、記者・キャスターがみせる表情、声のトーン、テロップの3つである。音声言語は通常のテキストと同様、これまで内容分析の対象となってきた。しかし、実際のテレビ報道は音声言語以外にも、「映像やテロップ、スタジオセット、キャスターの語りなど、テレビニュースを構成する様々な要素」(深澤 2011、p.28) からなる。これらの要素はそれぞれ「ニューステキストを構成している諸記号の、言語的、映像的、音響的な様態」(伊藤 2006、p.34) として、モードと呼ばれる。複数のモードに注目して分析する技法をマルチモダリティ分析という。マルチモードで伝わる内容を知るには言説分析がおそらく最適である。しかし、本研究は言説分析には踏み込まず、音声言語以外の3つのモード(表情、声のトーン、テロップ)がどういった使われ方をし、下位争点の評価に関連しているのかを内容分析の一部として量的に読み解くことにする。

以上を踏まえ、本研究は次の4つをリサーチ・クエスチョン(R.Q.)に据える。

「2020年東京オリンピック招致」のテレビ報道において、

- R.Q.1. 議題設定レベルの共振性は見られるのか
- R.Q.2. 焦点形成レベルの共振性は見られるのか
- R.Q.3. 評価レベルの共振性は見られるのか
- R.Q.4. 番組を構成する音声言語以外のモードはどのような役割を果たすのか

2 分析方法

2.1 分析対象

本研究の分析対象について述べる。対象とする期間は2013年9月2日（月曜）から2013年9月13日（金曜）の平日とした。これは、招致が決定した2013年9月8日（日曜；日本時間）をはさむ前後1週間である。対象とする番組は4局4番組とした。これらを表1に示す。これら番組の選択は、阪口（2014）を参考に、平日夜間の報道番組からおこなった⁴。これらの番組内で「2020年東京オリンピック招致」が扱われた場面を分析対象とした。

表1 分析対象とする番組⁵

番組	局	開始時刻（放送時間）
ニュースウォッチ9	NHK	21時00分（1時間00分）
NEWS ZERO	日本テレビ	22時54分（1時間04分）
報道ステーション	テレビ朝日	21時54分（1時間16分）
NEWS23	TBS テレビ	22時54分（0時間59分）

⁴ 字数制約のため、番組選択の詳細は <https://semi.on-w.com/> に公開する補足資料に記す。

⁵ 番組名は放送当時の表記にしたがう。開始時刻と放送時間については本研究の対象期間内で典型的なものを示す。

2.2 下位争点の抽出

本研究では、「2020年東京オリンピック招致」という争点（議題設定レベル）にかんする主な下位争点（焦点形成レベル）⁶を先に新聞記事から抽出し、それをテレビ報道にあてはめてコーディングすることとした。そして、新聞には見出されなかった下位争点がテレビに見つかった場合には、それを補足的に追加した⁷。この方針にしたがい、本研究は朝日新聞から下位争点を抽出することにした。表2に朝日新聞の記事検索条件を示す。この条件のもと、126件の記事が得られた。

表2 朝日新聞の記事検索条件

データベース	聞蔵Ⅱビジュアル
検索モード	詳細検索
対象紙誌	朝日新聞
キーワード	(オリンピック OR 五輪) AND 招致
発行日	2013年8月1日(木)～2013年9月15日(日)
検索対象	見出しと本文と補助キーワード
朝夕刊	朝刊(のみ)
本紙/地域面	本紙(のみ)
発行社	東京(のみ)

下位争点抽出の方法は次の通りである。まず126件の記事から首相動静やインデックスなど12件を除き、114件を下位争点の抽出対象とした。この114件の記事を読み、各記事が何を問題としているか、何を扱う記事かという点を、解釈的要素として記録した。そこから、それぞれの解釈的要素に共通する特有のキーワードをパッケージとして記録した⁸。そして、記録したパッケージか

⁶ 本稿は張(2000)、竹下(2008)に従い、議題設定レベルにあるものを「争点」(張2000;竹下2008)、焦点形成レベルにあるものを「下位争点」(張2000)と表現する。

⁷ 下位争点を先に新聞から抽出した理由については、脚注4に示す補足資料を参照。

⁸ このプロセスについては脚注4に示す補足資料を参照。

ら6つの下位争点を抽出した⁹。ただし、後にテレビ報道の分析を進める中で1つ（「理由なき賛成」）を追加したため、最終的に7つの下位争点をコーディングに採用した。これらを表3に示す。

表3 採用された下位争点

下位争点	説明
IOC 総会	ライバル都市の動向を除く、IOC 委員や日本招致団メンバーに関わる話題すべて。プレゼンに関する内容、票読み予想や投票の仕組みも含む。
ライバル都市 原発問題	イスタンブール、マドリード招致団の動向に関わるものすべて。 汚染水問題を含む、福島第一原子力発電所に関わる話題すべて。
経済効果	オリンピック招致により舞い込む経済効果にかんする話題すべて。インフラ面、街づくり、アベノミクスへの影響なども含む。
被災地	被災地への思い。被災地の方々の期待や課題、不安。
理由なき賛成	「楽しみですね」「東京でオリンピックぜひ見たいですね」などの、特に理由や根拠なく招致を盛り上げ、期待する発言を含むもの。
その他	招致に直接関係しない、1964年大会の際のエピソードや、「おもてなし」文化そのものまつわる話等を含む。

2.3 コーディング

はじめに番組データを整理した。分析に用いる番組データは放送をブルーレイディスクに録画して取得した。録画された番組からはまず、「2020年東京オリンピック招致」に触れている部分を抽出した。次に、抽出した部分を、下位争点1つを構成要素とするテーマ単位¹⁰に分けた。その上で、テーマ単位（本研究の場合は下位争点単位に等しいことになる）ごとに放送開始時刻、単位の時間、発言された音声、表示されたテロップを記録した。

次にコーディングをおこなった。コーディングでは、上で抽出した各テーマ単位をブルーレイディスクで1つずつ視聴した。そして、マニュアルに従ったコーディングをおこない、その結果をシートに記録した。記録した変数は6つ

⁹ こうした争点抽出の方法については烏谷（2011）を参照。

¹⁰ テーマ単位についてはクリッペンドルフ（1989）を参照。

ある。これらを以下に説明する。各変数の冒頭には、記録単位、分類したカテゴリー数、単一／複数選択、を示す。各変数のより詳しい説明については、コーディング・マニュアル¹¹を参照されたい。また、コーディングの信頼性はコーダー1名との一致度によって確認した¹²。

【1つ目】アクター（テーマ単位、7カテゴリー、複数選択）

ここでは「2020年東京オリンピック招致」のテレビ報道内で何らかの発言をする者をアクターと定義し、その種類を表4の7つに分類した。テーマ単位内に登場するすべてのアクターを記録した¹³。

表4 アクターの種類

アクターの種類	説明
IOC委員	IOC委員、日本招致団、イスタンブール・マドリッド招致団。
専門家	政治家、大学教授、コメンテーター。
市民	街頭などでインタビューを受ける市民・観光客、一般企業の広報担当。
記者	スタジオの外から現場リポートする者。
キャスター	スタジオで原稿を読む者。
ナレーター	記者とキャスターのいずれでもない、ナレーション担当の者。
その他	上のいずれにも該当しない者。海外記者、スポーツ選手、タレント。

【2つ目】下位争点（テーマ単位、7カテゴリー、単一選択）

テーマ単位に区切った内容がいずれの下位争点にあてはまるかを記録した。カテゴリーは表3のとおりである。

¹¹ コーディング・マニュアルは脚注4に示す補足資料に掲載する。

¹² コーディングの信頼性については、脚注4に示す補足資料に詳細を示す。

¹³ 脚注4に示す補足資料も参照。

【3つ目】評価（テーマ単位、3カテゴリー、単一選択）

前項で選択された下位争点が示される中で、「2020年東京オリンピック招致」がどういった評価・論調で報じられたかを記録した。分類は、ポジティブ（P）、ニュートラル（NT）、ネガティブ（N）の3つのカテゴリーとした。

【4つ目】記者・キャスターの表情（アクター単位、3カテゴリー、単一選択）

あるテーマ単位内でアクターに記者またはキャスターが記録されたとき、そのアクター1人を単位として、表情のみから受ける印象を記録した。ただし、表情が確認できる場合に限った。分類は、ポジティブ（P）、ニュートラル（NT）、ネガティブ（N）の3つのカテゴリーとした。

【5つ目】記者・キャスターの声のトーン（アクター単位、3カテゴリー、単一選択）

あるテーマ単位内でアクターに記者またはキャスターが記録されたとき、そのアクター1人を単位として、声色のみから受ける印象を記録した。ただし、喋りが確認できる場合に限った。分類は、ポジティブ（P）、ニュートラル（NT）、ネガティブ（N）の3つのカテゴリーとした。

【6つ目】テロップ（テロップ単位、3カテゴリー、単一選択）

画面中央下に表示されるテロップのみを対象に、そのテロップのみから受ける印象を記録した。ただし、アクターの会話文面をそのまま書き起こしたテロップと、名前・年齢・場所等を単独で表示したテロップは除外した。分類は、ポジティブ（P）、ニュートラル（NT）、ネガティブ（N）の3つのカテゴリーとした。

3 分析結果

3.1 議題設定レベル

本節では R.Q.1 にあたる、「2020 年東京オリンピック招致」のテレビ報道において議題設定レベルの共振性は見られるのか、を明らかにする。ここでの議題設定レベルは、各番組がどれほどの時間を「2020 年東京オリンピック招致」という争点に割いたかで測ることにする。結果を表 5 に示す。表の「単位」はテーマ単位（本研究では下位争点単位に等しい；2.3 参照）数を表す。また、表 5 の時間を各番組の各日の放送時間（表 1 参照）に対する割合にしたものを図 1 に示す。9 月 7 日と 8 日は週末のため分析対象期間外であることに注意されたい。図を見ると、おおむねどの番組も、東京開催が決まった翌日の 9 月 9 日まで「2020 年東京オリンピック招致」にかんする放送時間が上昇し、その

表 5 各番組が「2020 年東京オリンピック招致」に割いた時間

放送日	ニュースウォッチ9		NEWS ZERO		報道ステーション		NEWS23	
	時間	単位	時間	単位	時間	単位	時間	単位
9 月 02 日	0:00:55	2	0:00:25	1	0:02:17	1	0:10:03	9
9 月 03 日	0:01:58	3	0:02:42	3	0:00:00	0	0:00:00	0
9 月 04 日	0:01:40	5	0:07:20	7	0:04:35	6	0:02:56	5
9 月 05 日	0:05:26	9	0:07:25	6	0:06:40	9	0:07:16	6
9 月 06 日	0:15:02	17	0:08:35	8	0:13:04	4	0:10:11	10
9 月 09 日	0:14:12	13	0:33:15	14	0:49:09	21	0:22:05	13
9 月 10 日	0:29:02	11	0:07:15	4	0:06:18	1	0:00:00	0
9 月 11 日	0:00:00	0	0:00:00	0	0:00:00	0	0:00:00	0
9 月 12 日	0:05:15	6	0:01:36	1	0:05:30	2	0:00:18	1
9 月 13 日	0:10:26	4	0:10:12	10	0:09:18	2	0:05:12	1
合 計	1:23:56	70	1:18:45	54	1:36:51	46	0:58:01	45

¹⁴ この場合、仮に観測の結果、負の大きな相関がみられたとしても、それは有意なものではなく、サンプリングの偶然によるものと解釈することになる。実際のところ、一般報道番組が互いに独立でありこそすれ、負の相関にあるとは想定しがたいため、この前提を採用した。結果として、今回の順位相関係数はすべて正であった。

後に減る傾向を持つことが分かる。番組ごとに各放送日を放送時間で順位づけ(1～10位)し、番組間でSpearmanの順位相関係数を求めたものを表6に示す。検定においては、共振性(正の相関)があるかないかをみるため、片側(右側)検定¹⁴とした。表6をみると、ニュースウォッチ9とNEWS23の間以外では番組間に有意な相関が認められることが分かる。すなわち、それら番組間では議題設定レベルの共振性があるといえる。今回の順位相関係数は各日の放送時間をもとにした。そのため、この結果は、「どの日にどれほどの時間を『2020年東京オリンピック招致』という争点に割こうかという選択が似ている」ことを表す。

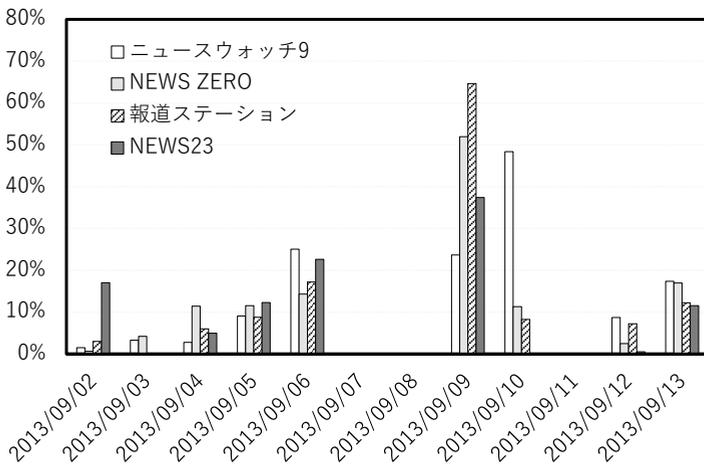


図1 各番組が「2020年東京オリンピック招致」に割いた時間の割合

表6 「2020年東京オリンピック招致」放送時間の番組間の順位相関係数

	ニュースウォッチ9	NEWS ZERO	報道ステーション
NEWS ZERO	0.71 [†]		
報道ステーション	0.81 ^{††}	0.89 ^{††}	
NEWS23	0.29	0.62 [†]	0.71 [†]

[†] $p < 0.05$, ^{††} $p < 0.01$ (片側検定)

3.2 焦点形成レベル

本節では R.Q.2 にあたる、「2020 年東京オリンピック招致」のテレビ報道において焦点形成レベルの共振性は見られるのか、を明らかにする。ここでの焦点形成レベルは、各番組がどれほどの時間を、表 3 の各下位争点に割いたかで測ることにする。番組ごとの結果を図 2 から図 5 に示す。それぞれ、東京招致が決定する前と後に各下位争点に割かれた時間である。番組ごとに各下位争点

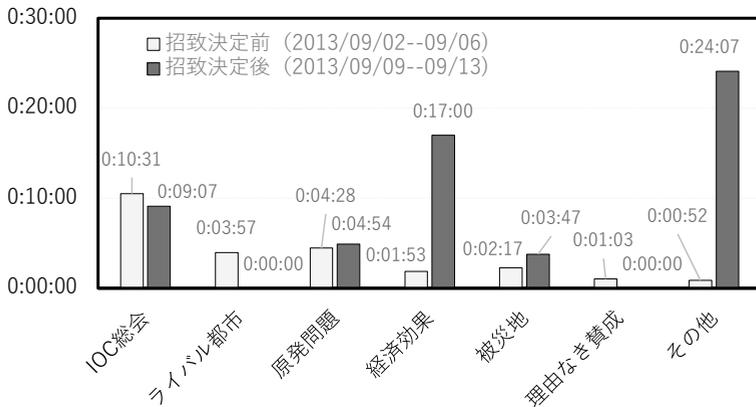


図 2 ニュースウォッチ 9 の下位争点の時間分布

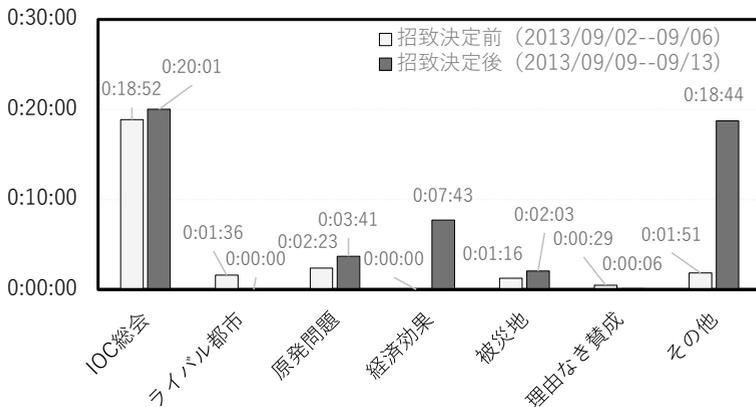


図 3 NEWS ZERO の下位争点の時間分布

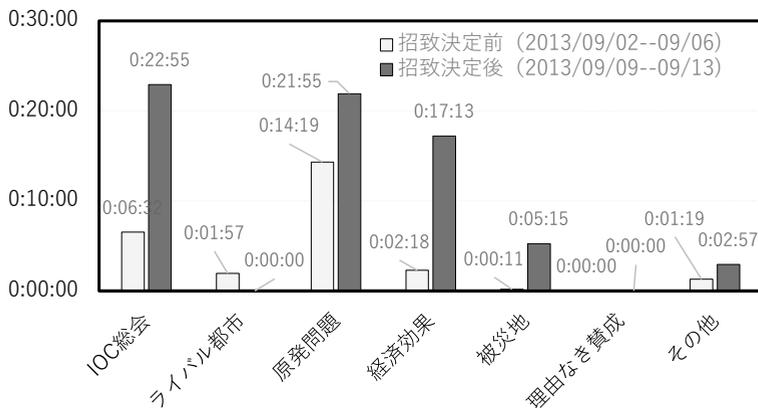


図4 報道ステーションの下位争点の時間分布

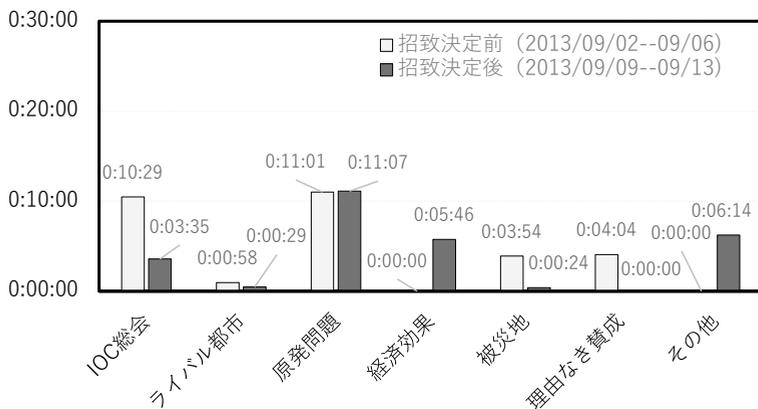


図5 NEWS23の下位争点の時間分布

表7 下位争点放送時間の番組間の順位相関係数

	ニュースウォッチ9	NEWS ZERO	報道ステーション
NEWS ZERO	0.88 ^{††}		
報道ステーション	0.81 ^{††}	0.82 ^{††}	
NEWS23	0.71 ^{††}	0.62 ^{††}	0.55 [†]

[†] $p < 0.05$, ^{††} $p < 0.01$ (片側検定)

を放送時間で順位づけし、番組間で Spearman の順位相関係数を求めたものを表 7 に示す。この際、下位争点は東京招致決定前の 7 つと後の 7 つに分け、1 位から 14 位までの順位とした。表 7 をみると、いずれの番組間でも有意な相関が認められることが分かる。すなわち、これら番組間では焦点形成レベルの共振性があるといえる。今回の順位相関係数は東京招致決定前と後の各下位争点の放送時間をもとにした。そのため、この結果は、「招致決定前と後でどの下位争点にどれほどの時間を割こうかという選択が似ている」ことを表す。

番組ごとの特徴にも触れておく。ニュースウォッチ 9 (図 2) と NEWS ZERO (図 3) は見た目にも似た分布となった。これら 2 番組では東京招致が決定する前後とも「IOC 総会」を多く取り上げた。また、招致決定後は「経済効果」と「その他」にも多くの時間を割いた。「経済効果」と「その他」が招致決定後に増えたのは報道ステーション (図 4) と NEWS23 (図 5) も同様である。ただし、これら 2 番組はより多くの時間を「原発問題」に割いた。

これらテレビ番組での下位争点の分布は、異なるメディアである新聞での下位争点の分布とも共振しているだろうか。この点の参考とするため、図 6 に両者の比較を示す。本研究では新聞としては朝日新聞だけを調べたため、ここでは 4 番組と朝日新聞との比較とした。図 6 において、4 番組の各下位争点に示す時間数は、各番組からの合計である。朝日新聞の各下位争点に示す数は、下位争点を見出す過程 (2.2 参照) でその下位争点があると判断された記事の数である。図の縦軸は、「計」に示す数¹⁵に対するそれぞれの割合である。図 6 からは、テレビと新聞の間に類似性があることが見てとれる。4 番組と朝日新聞のそれぞれにおいて 7 つの下位争点を割合で順位づけ (1 ~ 7 位) し、両者間で Spearman の順位相関係数を求めると 0.96 ($p=0.0014$) になる。したがって、両者間には有意な相関が認められる。すなわち、テレビと新聞といった

¹⁵ 朝日新聞の各下位争点に示す数の単純合計は 136 である。しかし、図の割合は記事総数としての 114 (2.2 参照) に対して算出した。単純合計と記事総数が一致しない理由は、1 つの記事が複数の下位争点を持ちうるからである。

異なるメディア間においても共振性があると示唆される。ただし、これには2つの点で留意を要する。1つ目は、朝日新聞の分析対象期間が2013年8月1日から9月15日までと、4番組の分析対象期間の4倍ほどに及ぶ点である。2つ目は、テレビにおいては放送時間の合計をとったが、新聞においては下位争点が含まれる記事数で代用した点である。詳細を確かめるには、今後、分析対象期間をそろえ、新聞において各下位争点に割かれた文字数を調べるといった研究が必要である。

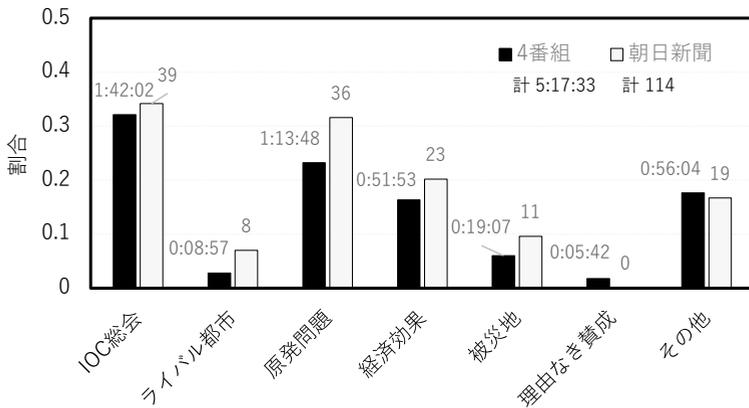


図6 テレビと新聞の下位争点分布の比較

3.3 評価レベル

本節ではR.Q.3にあたる、「2020年東京オリンピック招致」のテレビ報道において評価レベルの共振性は見られるのか、を明らかにする。ここでの評価レベルは、各番組が表4の各下位争点を通して、どれほどの時間をどの評価・論調(2.3の評価変数を参照)に割いたかで測ることとする。結果を図7に示す。また、各番組で下位争点ごとにポジティブ(P)、ニュートラル(NT)、ネガティブ(N)の3つを放送時間で順位づけ(1~3位)したものを表8に示す¹⁶。ただし、下位争点のうち「理由なき賛成」は必ずポジティブであるため、

いずれの図表からも除外した。

図7と表8から分かることを以下に3つ述べる。1つ目は3つの番組の類似性である。表8を見ると、ニュースウォッチ9・NEWS ZERO・NEWS23の3番組では、P・NT・Nの放送時間順位がいずれの下位争点においてもほぼそろっていることが分かる。例外は放送時間が0で同順位(2位)となる部分のみである(たとえばNEWS ZEROの下位争点「被災地」ではNTとNの放送時間がともに0のため、いずれも2位となっている)。こうした下位争点においても1位は同じであるため、類似性はあるものとみてよい。もし各番組が無作為にP・NT・Nの順位づけをするならば、2つの番組間で6つの下位争点のすべてでP・NT・Nの順位が同じになる確率は、同順位を考慮しない場合で0.000021となる¹⁷。これは通常の有意水準(たとえば1%)を大きく下回ることから、そうした2番組ではP・NT・Nの順位づけに関連があると認められる。すなわち、ニュースウォッチ9・NEWS ZERO・NEWS23の3番組間には評価レベルの共振性があるといえる。今回の確率計算は下位争点ごとにつけられたP・NT・Nの放送時間の順位をもとにした。そのため、この結果は「下位争点ごとにどれほどの時間をP・NT・Nのそれぞれに割こうかという選択が似ている」ことを表す。

2つ目は報道ステーションの独自性である。報道ステーションでは6つの下位争点のうち4つでほかの番組と異なる順位づけが見られた(表8の薄灰色部)。ほかの番組と順位づけが一致した下位争点は2つある(「IOC総会」と「原発問題」)。順位づけが無作為の場合に2つの番組間で2つ以上の下位争点でP・NT・Nの順位が同じになる確率は0.26となる¹⁸。これは通常の有意水準を大

¹⁶ 順位付けの方法については脚注4に示す補足資料に議論を記す。

¹⁷ P・NT・Nの3つの順位づけには6通りある。したがって、もし順位づけが無作為であれば、ある下位争点において、2番組間でその順位づけが一致する確率は1/6、一致しない確率は5/6となる。よって、6つの下位争点のうち n 個の下位争点で順位づけが一致する確率は ${}_6C_n \times \left(\frac{1}{6}\right)^n \times \left(\frac{5}{6}\right)^{6-n}$ となる。

大きく上回ることから、有意と判断するほど珍しい事象ではない。すなわち、ほかの番組と比べたときの報道ステーションのP・NT・Nの順位づけは無作為である場合と区別がつかず、評価レベルの共振性があるとはいえない。

3つ目は「原発問題」がネガティブをけん引したことである。図7をみると、全体ではポジティブが多い中、「原発問題」が「2020年東京オリンピック招致」

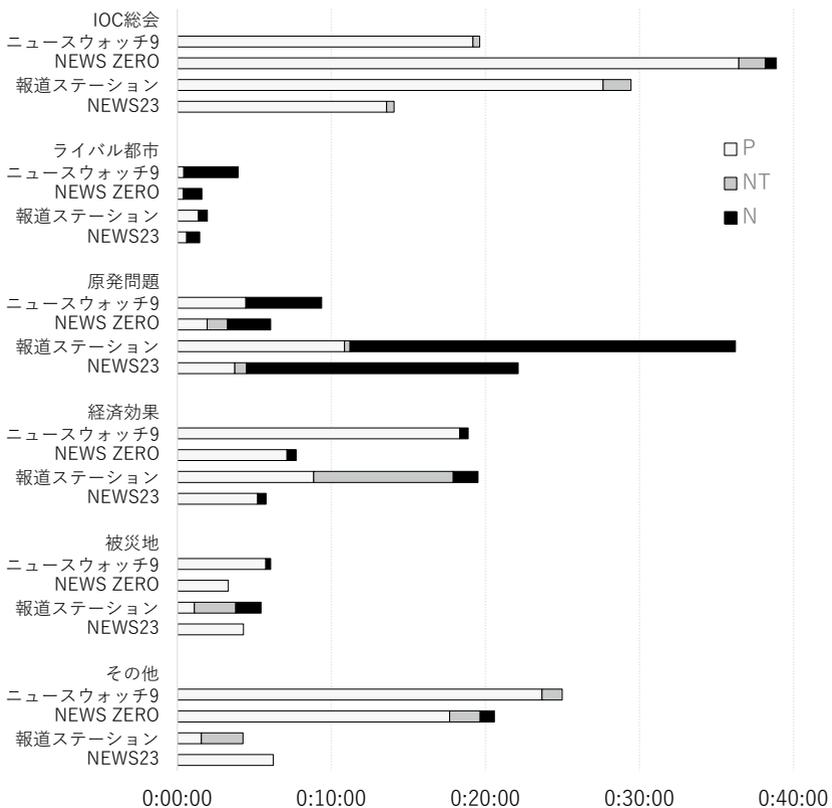


図7 各番組の下位争点ごとの評価・論調の時間分布

¹⁸ $\sum_{n=2}^6 {}_6C_n \times \left(\frac{1}{6}\right)^n \times \left(\frac{5}{6}\right)^{6-n}$ より。なお、3つ以上の下位争点で順位づけが一致する確率は0.062、4つ以上だと0.0087となる。したがって、4つの下位争点で順位的一致がみられるなら5%および1%のいずれの水準でも有意だと判断することになる。

表8 各番組の下位争点ごとの評価・論調の放送時間順位

	IOC 総会			ライバル 都市			原発問題			経済効果			被災地			その他		
	P	NT	N	P	NT	N	P	NT	N	P	NT	N	P	NT	N	P	NT	N
ニュースウォッチ9	1	2	3	2	3	1	2	3	1	1	3	2	1	3	2	1	2	3
NEWS ZERO	1	2	3	2	3	1	2	3	1	1	3	2	1	2	2	1	2	3
報道ステーション	1	2	3	1	3	2	2	3	1	2	1	3	3	1	2	2	1	3
NEWS23	1	2	3	2	3	1	2	3	1	1	3	2	1	2	2	1	2	2

にネガティブな評価・論調を投げかける主な下位争点になっていたことが分かる。いずれの番組も「原発問題」における順位は放送時間の多い側からネガティブ、ポジティブ、ニュートラルだった。特にNEWS23は8割ほど、報道ステーションは7割ほどを、「原発問題」のネガティブな評価・論調に割いた。一方、ニュースウォッチ9はネガティブがわずかにポジティブを上回ったものの、ポジティブの比率も5割に迫った。

個別の下位争点についても要点に触れておく。「IOC 総会」では、どの番組でもポジティブな評価・論調が9割を超えた。ネガティブだったのはNEWS ZEROで9月9日（月曜）に放送された1テーマ単位（番組開始からの時刻は0:06:38から0:07:42まで）のみである。その1単位は、東京招致の決定後、招致委員のメンバーが実際のロビー活動について話す場面だった。厳しい状況で手ごたえがなかったことで、他の候補都市の方が優勢だと思わせる発言であった。

「経済効果」ではいずれの番組でもネガティブが1割をきった。後には問題となった予算への懸念も見られなかった。ニュースウォッチ9・NEWS ZERO・NEWS23の3番組では、それに対応するようにポジティブが9割以上だった。しかし、報道ステーションではポジティブとニュートラルがともに5割弱で拮抗した。

同じ傾向は「被災地」と「その他」にも見られた。「被災地」については、ニュースウォッチ9・NEWS ZERO・NEWS23の3番組でポジティブが9割

以上ないしは10割だった。しかし、報道ステーションではニュートラルが5割ほどを占め、ネガティブ、ポジティブが順に続いた。「その他」については、ニュースウォッチ9・NEWS ZERO・NEWS23の3番組でポジティブが9割弱以上から10割だった。しかし、報道ステーションではニュートラルが6割ほどを占め、ポジティブは4割弱にとどまった。

「理由なき賛成」はポジティブであることが自明のため、評価・論調の分析からは除外している。ただし、図2から図5をみると、いずれの番組も「理由なき賛成」にあてた時間が少数ながらあったものの、報道ステーションのみ例外で0時間だった。

最後に、下位争点にわけず、全体でP・NT・Nがどのような分布だったかを確認しておく。結果を図8に示す。いずれの番組でもポジティブにもっとも長い時間を割り、後にネガティブ、ニュートラルが続いた。この並び順は番組間で同じだが、実際には4つの下位争点で報道ステーションとそれ以外の3番組の間に違いがみられたことは上で触れた通りである。また、ネガティブは全体に散見されたわけではなく、その多くが下位争点「原発問題」からきていることも上で触れた通りである。

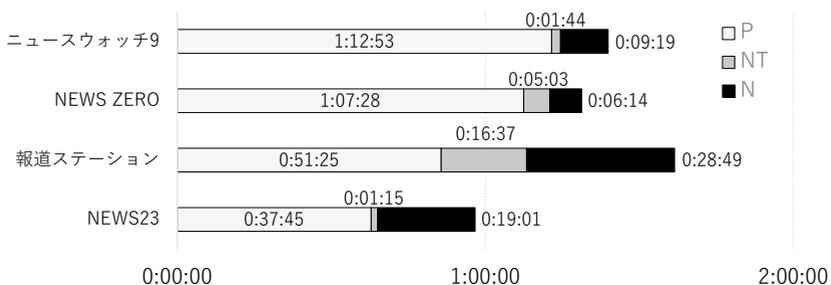


図8 各番組の評価・論調の時間分布

3.4 マルチモード

本節では、R.Q.4にあたる、「2020年東京オリンピック招致」のテレビ報道

において、番組を構成する音声言語以外のモードはどのような役割を果たすのか、に言及する。本研究で扱ったそのようなモードは、記者・キャスターの表情、記者・キャスターの声のトーン、テロップの3変数である。いずれも評価変数と同様、ポジティブ (P)、ニュートラル (NT)、ネガティブ (N) の3カテゴリーに分類された。これら3つのモードが評価変数とどのような関係にあったのかを図9に示す。図9では横に4番組が、縦に3つのモードが並び、それぞれの横軸が評価変数のP・NT・N、縦軸がモード変数のP・NT・Nになっている。なお、1つのテーマ単位に対応する評価変数は1つであるのに対し、これらモードにかんする3変数では2つ以上が対応しうる。そうした場合は対応する数だけ評価変数に結び付けて集計した。たとえば、あるテーマ単位の評価変数がP、そのテーマ単位に登場するキャスターが2名おりそれぞれの表情がNTとNであったとき、P-NTの組み合わせが1つ、P-Nの組み合わせが1つとして集計した。図のバブルの面積はこうして集計された組み合わせ数に比例させている。

図の見方についても説明しておく。評価変数とモード変数が一致する場合、図では右上がりの対角上 (N-N、NT-NT、P-Pの3点) に分布することになる。これより上に分布するものは、評価変数に対してモード変数がNTまたはPよりであったことを意味する。一方、下に分布するものは、評価変数に対してモード変数がNTまたはNよりであったことを意味する。

図9および各モード変数そのものから分かることを4つ述べる。1つ目は、記者・キャスターの表情と声のトーンの類似性である。コーディングの結果、個々の記者・キャスターについて、表情変数と声のトーン変数は一致することが多かった。実際、図9の集計をみると、評価変数と表情変数の関連状況は、評価変数と声のトーン変数の関連状況とよく似ていることが分かる。このことから、記者・キャスターの表情と声のトーンは一体となってニュース言説の産出に寄与したものと推測される。

2つ目は、ニュースウォッチ9の表情変数および声のトーン変数がみせた中

和化の傾向である。ニュースウォッチ9では、評価変数のPまたはNをやや緩める傾向が表情変数および声のトーン変数にみられた。たとえば、評価変数がPであっても、表情変数はPだけでなくNTにも幾分の散らばりをみせた。同様の傾向はNEWS ZEROにもみられたが、ニュースウォッチ9ほどではなかった。

3つ目は、その一方でNEWS23のみせた対照性である。NEWS23では比較的、評価変数と表情変数、また評価変数と声のトーン変数が一致する傾向がみられた。これは、言語的（テロップを除く）な評価・論調（評価変数）とモードのもたらす印象がそろっていたことを意味する。そして、報道ステーションは以上の中間的な分布となった。

4つ目は、テロップのもたらすポジティブ・ネガティブの散らばりである。短い時間で繰り返されるテロップは、表情および声のトーンとくらべてP・NT・Nのいずれにもより散らばり、評価変数との関連がより薄かった。これは、評価変数のもたらす評価・論調に対して、テロップが多様な印象を与えるモードとしてニュース言説の産出に寄与したことを示唆する。

以上の参考とするため、各モード変数がどれほど評価変数と一致するかをKrippendorffの a で見積もった。結果を表9に示す。評価変数と記者・キャスターの表情変数の関連は、ニュースウォッチ9で最も低く（ $a=0.28$ ）、NEWS ZERO（0.49）、報道ステーション（0.60）、NEWS23（0.84）の順で高くなった。評価変数と記者・キャスターの声のトーン変数の関連も同様である。評価変数とテロップ変数の関連は、表情変数および声のトーン変数の場合とくらべて低かった（最小で0.08、最大で0.43）。また、ニュースウォッチ9では、3つのいずれのモード変数も95%の信頼区間に $a=0$ を含む結果となった。 $a=0$ は、評価変数とそのモード変数が独立であり、別々にニュース言説に貢献したことを意味する。一方、 a が高いほど両者の関連は強まり、より一体的にニュース言説に貢献したことになる。この関連について、深澤（2011）は「ニュース分析では、語りや映像、音声などが、合致し、増幅し合い、あるいは矛

盾しながら言説がいかに編成されているかを問うことが肝要」(p. 50)と説く。したがって、記者・キャスターの表情および声のトーンが実際にどういった貢献をしたのかについては言説分析を導入して明らかにする必要がある。

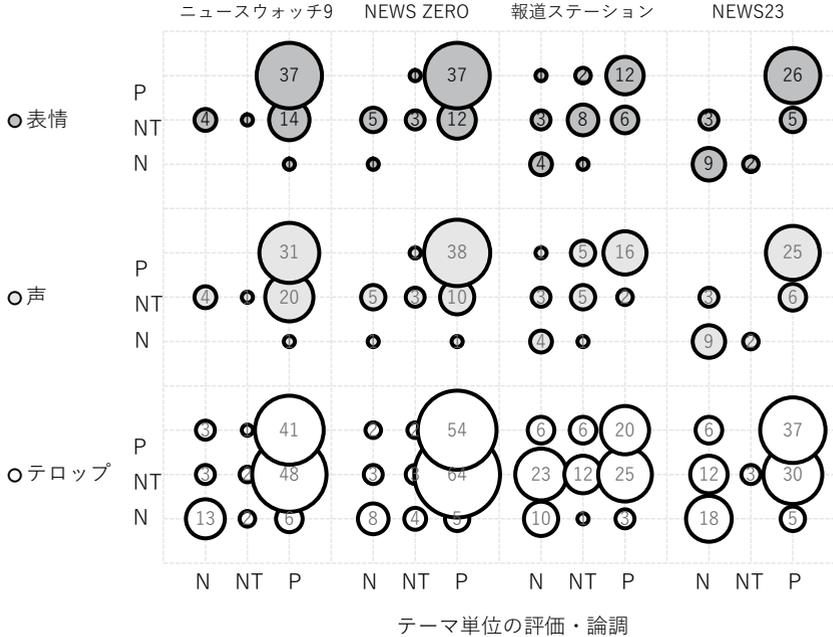


図9 音声言語以外のモードと評価変数の関連

表9 モードと評価変数の一致度 (Krippendorff の α)

モード	ニュースウォッチ9	NEWS ZERO	報道ステーション	NEWS23
記者・キャスター の表情	0.28 (-0.05 ~ 0.54)	0.49 (0.23 ~ 0.70)	0.60 (0.33 ~ 0.80)	0.84 (0.68 ~ 0.94)
記者・キャスター の声のトーン	0.13 (-0.17 ~ 0.39)	0.51 (0.23 ~ 0.72)	0.64 (0.38 ~ 0.82)	0.82 (0.65 ~ 0.92)
テロップ	0.21 (0.00 ~ 0.40)	0.08 (-0.11 ~ 0.26)	0.30 (0.12 ~ 0.46)	0.43 (0.25 ~ 0.59)

(括弧内の数値は95%信頼区間)

4 考察

4.1 議題設定レベル

本節では、「2020年東京オリンピック招致」のテレビ報道における、番組間の議題設定レベルの共振性について考察する。図1にみたとおり、番組の放送時間に占める「2020年東京オリンピック招致」という争点の放送時間は、どの番組でもおおむね似た傾向であった。すなわち、招致決定日（日本時間で2013年9月8日の日曜日）に向けて少しずつ増えていき、招致決定の翌日（9月9日の月曜日）にピークを迎え、その後減少する傾向であった。順位相関係数（表6）からは、ニュースウォッチ9とNEWS23の間を除くすべての組み合わせで日ごとの放送量に有意な関連があるとされた（3.1参照）。したがって、多くの番組間に議題設定レベルの共振性があると判断できる。張（2000）の先行研究でも、調査対象であった5つの報道番組間のすべてで議題設定レベルの共振性が確認された（張2000の表2および表4）。本研究の結果は、その先行研究に大きな矛盾なく沿ったものといえる。

4.2 焦点形成レベル（新聞との比較）

本節では、「2020年東京オリンピック招致」の報道における、テレビと新聞の下位争点の置き方について考察する。図6にみたとおり、2つの留意点（3.2末尾参照）を踏まえた上で、各下位争点の全体に占める割合は、テレビ（4番組合計）と新聞（朝日新聞のみ）で似た傾向であった。各下位争点の放送時間にもとづく順位相関係数からは、テレビと新聞の間で下位争点の順位づけに有意な関連があるとされた（3.2参照）。したがって、テレビと新聞という異なるメディア間に焦点形成レベルの共振性があると示唆される。張（2000）も、調査対象であった5つの報道番組のうち4つ¹⁹と新聞2紙の間に焦点形成レベルの共振性を見出した（張2000の表6）。本研究の結果はその先行研究に大き

¹⁹ 張（2000）では、焦点形成レベルにおいてNHKのみ2つの新聞のいずれとも有意な関連は結論されなかった。

な矛盾なく沿ったものといえる。

以下、図6において上位となった下位争点に言及しておく。テレビと新聞のいずれにおいても最も大きな割合で取り上げられた下位争点は「IOC 総会」だった。テレビ報道では日本招致団メンバーを追い、ロビー活動やプレゼンテーション、凱旋会見でのメンバーの言葉などを捉えた内容がみられた。当然ながら、この下位争点内ではアクターとして「IOC 委員」（表4参照）の登場する割合がほかの下位争点内よりも多かった。

テレビと新聞のいずれにおいても2番目に大きな割合で取り上げられた下位争点は「原発問題」だった（図6）。もともと、2011年の震災時に起きた東京電力福島第一原子力発電所の事故には世界が注目してきた。2013年4月からは新たな汚染水漏れが問題になり、招致にあたっての懸念材料になっていた。こうした事情から、「原発問題」が「2020年東京オリンピック招致」の重要な下位争点になったとみられる。また、IOC総会の招致プレゼンテーションの場では、安倍晋三首相（当時）が福島第一原発について「Let me assure you, the situation is under control」と発言した。その認識が疑問視されたほか、発言を受けて原発事故の復旧が日本の国際公約にもなったため、招致決定後も継続して扱われることとなった（図2から図5参照）。テレビ報道において、この下位争点内ではアクターとして政治家や研究者といった「専門家」が登場して見解を述べたり、海外記者（アクターでは「その他」に該当）らが登場して意見が紹介されたりする割合が高かった。

テレビと新聞のいずれにおいても「その他」を除いて3番目に大きな割合で取り上げられた下位争点は「経済効果」だった（図6）。この下位争点では、オリンピック・パラリンピックを見据え、インフラの充実、企業の商品開発、サービス面での取り組みを紹介するテレビ報道が見られた。中心になったのは、街頭でのインタビューや企業の期待を取材するVTRだった。そのため、この下位争点にはアクターとして「市民」がほかの下位争点よりも高い割合でみられた。

4.3 焦点形成レベル

本節では、「2020年東京オリンピック招致」のテレビ報道における、番組間の焦点形成レベルの共振性について考察する。招致決定前と後に各番組が7つの下位争点をどれほど扱ったかは図2から図5にみたとおりでである。各下位争点の放送時間にもとづく順位相関係数（表7）からは、すべての番組間で下位争点の順位づけに有意な関連があるとされた（3.2参照）。したがって、4番組のすべての間に焦点形成レベルの共振性があると判断できる。張（2000）も、調査対象であった5つの報道番組について、2つをのぞいた²⁰ほかすべての組み合わせで焦点形成レベルの共振性を見出した（張2000の表6）。本研究の結果はその先行研究に大きな矛盾なく沿ったものといえる。

以下、実際に放送された下位争点について言及しておく。招致が決定する前、ニュースウォッチ9（図2）とNEWS ZERO（図3）は「IOC総会」を中心とする報道をおこなった。一方、報道ステーション（図4）はほかの下位争点の2倍以上の時間を「原発問題」に割いた。NEWS23（図5）も「IOC総会」と同じ程度の時間を「原発問題」に割いたことから、「原発問題」を重要な下位争点に捉えていたと想像できる。

招致が決定した後では、どの番組でも「経済効果」の扱いが増えた（図2から図5）。また、報道ステーション以外の3番組では「その他」に属する報道も多くなされた。たとえば、ニュースウォッチ9では9月12日に日本の「おもてなし」文化が報じられた。また、NEWS ZEROでは9月9日に前回の東京オリンピック大会を振り返る報道がなされた。だが、最も大きかったのは佐藤真海選手への注目だった。佐藤選手は当時、2012年ロンドンパラリンピックまでの3大会に連続出場していた代表選手であり、日本招致団のメンバーでもあった。また、2011年の震災で被害を受けた宮城県気仙沼の出身で、招致を決めるIOC総会のプレゼンテーションでは義足のジャンパーとしてスポー

²⁰ 張（2000）では、焦点形成レベルにおいてNHKと日本テレビ、NHKとテレビ朝日の2つの組み合わせでのみ有意な関連は結論されなかった。

ツの力を語った。これが東京招致の決定に効いたと注目され、ニュースウォッチ9、NEWS ZERO、NEWS23ではスタジオ出演や特集が組まれたのである。佐藤選手に対するインタビューや特集には、IOC総会でのプレゼンテーションや被災地に関わるものも多かったが、招致には直接関わらない、佐藤選手の半生を紹介する報道も目立った。これが、招致の決定後に「その他」が増えた大きな要因である。

4.4 評価レベル

本節では、「2020年東京オリンピック招致」のテレビ報道における、番組間の評価レベルの共振性について考察する。表8にみたとおり、下位争点ごとに各評価・論調（P・NT・N）に割かれた放送時間は、報道ステーションを除く3つの番組（ニュースウォッチ9・NEWS ZERO・NEWS23）で似た傾向にあった。その傾向が無作為に生じる確率からは、これら3つの番組間で下位争点ごとのP・NT・Nの順位づけに有意な関連があるとされた（3.3参照）。したがって、4つの番組のうち3つの間に評価レベルの共振性があると判断できる。張（2000）は1つの下位争点についてのみ評価を調べ、テレビ・読売新聞・朝日新聞の3つのメディア間に評価レベルの明確な共振性はないとした（張2000の図1）。7つの下位争点のうち6つを用いて共振性があったとした本研究の結果は、その先行研究と対照的である。ただし、張（2000）がテレビと新聞の間で調べたのに対し、本研究はテレビ番組間のみでの共振性となる。

以下、評価レベルの詳細を確認しておく。図7をみると、全体では「ライバル都市」と「原発問題」の2つの下位争点を除いて、ポジティブが圧倒したことが分かる。このことは、「2020年東京オリンピック招致」のテレビ報道が賛成に偏っていたことを表す。特に、ニュースウォッチ9とNEWS ZEROでは、それぞれの「2020年東京オリンピック招致」にかんする放送時間全体の9割近くがポジティブであった（図8）。したがって、この2番組は特に招致に前向きな報道姿勢をみせたといえる。

一方、同じ図7から分かるとおり、少数にとどまったネガティブの多くは、下位争点「原発問題」にみられた。特に時間を割いたのは報道ステーションとNEWS23である。報道ステーションは36分14秒、NEWS23は22分08秒を「原発問題」に当て、それぞれその7割および8割ほどにネガティブな評価・論調を埋め込んだ。これは、同じ「原発問題」にニュースウォッチ9が9分22秒、NEWS ZEROが6分4秒とより少ない時間を割き、ネガティブがそれぞれの5割ほどにとどまったことと対照的である。福島第一原発の事故処理を巡っては、招致のためのプレゼンテーションや会見でIOC委員や海外メディアから質問が相次ぎ、日本の不安材料であった。ほかの下位争点では全体にわたってポジティブが目立ち、テレビ報道が東京招致に向けた雰囲気を作る中、「原発問題」にみせた報道ステーションとNEWS23の姿勢は特徴的だったといえる。

報道ステーションではほかの下位争点でも、P・NT・Nの順位づけに違いがみられた(表8)。たとえば「経済効果」「被災地」「その他」でニュートラルがほかの番組より目立った。また「理由なき賛成」は扱われなかった(図4)。そのため、ほかの番組と比べると、報道ステーションにはより中立的な立場を意識させる報道傾向があったといえる。確率にもとづいた検定からは、4つの番組のうち報道ステーションのみ、ほかの3番組と評価レベルの共振性があるとはいえず(3.3参照)、異なる報道姿勢をみせたと判断できる。

4.5 マルチモード

本節では、「2020年東京オリンピック招致」のテレビ報道における、音声言語以外のモードについて考察する。本研究では、キャスター・記者の表情、キャスター・記者の声のトーン、テロップの3つを音声言語以外のモードとして扱った。

ニュースウォッチ9では、キャスター・記者の表情変数と評価変数の関連が薄かった。また、ニュースウォッチ9からNEWS ZERO、報道ステーション、NEWS23の順に関連が高まった。キャスター・記者の声のトーン変数も同様

であった（以上、表9および図9）。関連が高いほど、笑顔で軽快に語る様子がその下位争点のポジティブ評価と結びついている。また、険しい表情で語る様子がその下位争点のネガティブ評価と結びついている。

藤田（2006）によると、「カメラ視線やキャスターの『語り（トーク）』は、『私（キャスター）は、あなた（視聴者）に向かって』語りかけているという密接な関係を生む」（p.52）という。そして、「キャスターの『語るという行為』自体が、擬似的な対人コミュニケーションの関係を構築し」（pp.52-53）、テレビ独自のマルチモダリティになるのだという。したがって、記者・キャスターの表情や声のトーンと、そこに提出されている下位争点の評価の関連が強い場合、記者・キャスターの表情や話し方が番組を構成する要素（モード）として視聴者により強い影響を与えることが考えられる。そうした傾向が民放側に強く、NHKに弱いという今回の結果（表9）は、単に記者・キャスターの配役による偶然ではないのかもしれない。

テロップ変数からは、番組に流れるテロップと下位争点の評価の関連がより薄いことが分かった（表9および図9）。調査対象となったテロップのなかには、「決定まであと4日 五輪招致活動が大詰めに」「東京を支持する声」「汚染水問題に質問集中」など、下位争点の評価と結びつくものもあれば、「コンパクト」「義足のジャンパー」「帰国の途へ」など、テロップだけでは明瞭なポジティブまたはネガティブだと判断されないものも多く見られた。この点が今回の結果に影響した。ただし、田中（2006）は、（ナレーションや）テロップが視聴者に「感情移入しながらニュースを見ることのできる特定のポジションを」（p.144）提供するという。そうであれば、テロップが1つのモードとして下位争点の評価にどう結びつくかは引き続き重要である。今回の分析はテロップを統語的単位に区切って記録したが、今後はテロップにも命題単位またはテーマ単位を導入するなど改善して取り組む余地があろう。

5 まとめ

本研究は Noelle-Neumann and Mathes (1987) の示した共振性をテレビの報道番組で検証することを目的に据えた。共振性とは、報道において異なるメディアが似た争点、下位争点、評価を選ぶ傾向のことである。それぞれ、議題設定レベル、焦点形成レベル、評価レベルという (Noelle-Neumann and Mathes 1987)。この目的のため、本研究は特に「2020年東京オリンピック招致」がどう報じられたかを事例に取り上げた。分析対象には平日夜の報道番組から4つを選んだ。それらはニュースウォッチ9 (NHK)、NEWS ZERO (日本テレビ)、報道ステーション (テレビ朝日)、NEWS23 (TBS テレビ) である。分析期間は2013年9月2日 (月曜) から9月13日 (金曜) の平日10日分とした。これは、オリンピックの東京招致が決定した9月8日 (日曜; 日本時間) の前後1週間にあたる。本研究はこの期間に各番組が放送した「2020年東京オリンピック招致」にかかわる部分を抽出した。そして、量的な内容分析を導入し、ヒューマン・コーディングでアクター、下位争点、評価の3変数と、記者・キャスターの表情、声のトーン、テロップの3変数の、計6変数をコード化した。後者3つは、番組の音声言語以外の要素をマルチモードとして取り出したものである。下位争点変数の分類カテゴリーは事前に朝日新聞から抽出したものを元にした。評価変数およびマルチモード3変数の計4つでは、それぞれ内容、表情、声のトーン、テロップの、ポジティブ・ニュートラル・ネガティブを記録した。コーディングの信頼性はコーダーを導入して検証した。共振性の検証には主に Spearman の順位相関係数を用いた。以下、本研究から明らかになったことを6つ述べる。

1つ目は、「2020年東京オリンピック招致」という争点にみられた下位争点である。本研究では次の7つが見出された。すなわち、「IOC総会」「ライバル都市」「原発問題」「経済効果」「被災地」「理由なき賛成」「その他」である (表3)。このうち「理由なき賛成」を除く6つは事前に朝日新聞から抽出された。「理由なき賛成」のみテレビ番組の分析を通じて追加された。

2つ目は、テレビ番組における議題設定レベルの共振性である。本研究では、4つの番組間（6通りの組み合わせ）のうち、ニュースウォッチ9とNEWS23の間を除くすべてで、「2020年東京オリンピック招致」という争点にかんする日ごとの放送量（図1）に有意な関連が認められた（表6）。すなわち、それら番組間には議題設定レベルの共振性があるといえる。

3つ目は、テレビ番組と新聞における焦点形成レベルの共振性である。本研究では、4つの番組の合計と朝日新聞の間で、下位争点ごとの報道量（図6）に有意な関連が認められた。ここからは、テレビと新聞という異なるメディア間に焦点形成レベルの共振性があると示唆される。ただし、朝日新聞の対象期間がテレビ番組よりも長いこと、テレビ番組と朝日新聞で報道量に用いた指標が異なること、の2つに留意が必要（3.2末尾）である。

4つ目は、テレビ番組における焦点形成レベルの共振性である。本研究では、4つの番組間のすべてで、下位争点ごとの放送量（図2から図5）に有意な関連が認められた（表7）。すなわち、4つの番組間には焦点形成レベルの共振性があるといえる。

5つ目は、テレビ番組における評価レベルの共振性である。本研究では、4つの番組のうち報道ステーションを除く3つの間で、下位争点ごとのポジティブ・ニュートラル・ネガティブに当てられた放送量（図7および表8）に有意な関連が認められた。すなわち、ニュースウォッチ9・NEWS ZERO・NEWS23の間には評価レベルの共振性があるといえる。一方、報道ステーションはそれら3番組と異なる順位づけの評価をおこない、独自の報道姿勢をみせた。4番組全体ではポジティブが卓越した（図8）。

6つ目は、テレビの音声言語以外のモードについてである。本研究において、記者・キャスターの表情のポジティブ・ニュートラル・ネガティブは、声のトーンのそれとよく合致することが分かった。その上で、表情および声のトーンは、ニュースウォッチ9において、下位争点の評価との関連が薄かった（表9）。すなわち、ニュースウォッチ9における記者・キャスターの表情および声のト

ーンには、下位争点の評価を緩めて落ち着いた印象を与える傾向があった（図9）。この関連は、民放であるNEWS ZERO、報道ステーション、NEWS23といくにつれ高くなった。すなわち、記者・キャスターの表情や声のトーンが下位争点の評価とより連動していた。また、テロップは全体的に下位争点の評価との関連が薄かった。

以上にもみるとおり、共振性は3つのレベルのいずれにも認められた。権力に統制されず報道の自由を持つメディアがなお共振する場合、その画一性は社会的な議論を細らせる可能性がある。「2020年東京オリンピック招致」の場合、たとえば予算についての議論をこの時点でせず、政治家や招致委員のいう「コンパクトな大会」をそのまま受け入れたのはジャーナリズムとして妥当だっただろうか。また、賛成に偏った放送から置き去りにされ沈黙にいたった声が被災地のほかにもなかっただろうか。オリンピックの政治性、商業性、利権への疑問はなかっただろうか。招致に向けた熱狂の中でこうした指摘をすることは確かに難しい。しかし、それを放棄するならばジャーナリズムはたちゆかなくなる。本研究の結果はこのような点で報道のあり方を考える題材になれば幸いである。本研究は、先行する張（2000）とは評価レベルで異なる結果を得た。そのため、メディアの共振性については今後も他の事例で検証されるべきである。

参考文献

[英文]

Maxwell E. McCombs and Donald L. Shaw 'The agenda-setting function of mass media' *The Public Opinion Quarterly*, 36 (2) (1972), pp. 176-187

Elisabeth Noelle-Neumann 'Return to the concept of powerful mass media' *Studies of Broadcasting*, 9 (1973), pp. 67-112

Elisabeth Noelle-Neumann and Rainer Mathes 'The "Event as Event" and the "Event as News": The Significance of "Consonance" for Media Effects Research' *European Journal of Communication*, 2 (4) (1987), pp. 391-414

【和文】

- 伊藤守「ニュースのディスコース分析、マルチモダリティ分析」『テレビニュースの社会学』伊藤守編、(世界思想社、2006) pp.15-36
- 上滝徹也「テレビニュースの多様化とその内実」『放送学研究』39 (1989)、pp.171-183
- 内田樹「『炭鉱のカナリア』が鳴き止んだら」『街場の五輪論』内田樹、小田嶋隆、平川克美著、(朝日新聞出版、2014) pp.9-15
- 烏谷昌幸「ディスコース分析、内容分析—新聞記事を資料として—」『メディアの卒論』藤田真文編著、(ミネルヴァ書房、2011) pp.97-125
- クラウド・クリッペンドルフ (Krippendorff, Klaus) 『メッセージ分析の技法: 「内容分析」への招待』三上俊治・椎野信雄・橋元良明訳、(勁草書房、1989)
- 阪口真平「テレビニュースの共振性の分析: 2012年『社会保障と税の一体改革』報道を例に」(早稲田大学大学院政治学研究科ジャーナリズムコース修士論文、2014)
- 竹下俊郎『増補版メディアの議題設定機能』(学文社、2008)
- 田崎篤郎、児島和人『マス・コミュニケーション効果研究の展開 [改訂新版]』(北樹出版、2003)
- 田中東子「ポピュラー化するニュースとメディア・ポピュリズム—テレビの政治報道分析を通じて」『テレビニュースの社会学』伊藤守編、(世界思想社、2006) pp.128-149
- 張寧「ニュース報道におけるメディア間の共振性の検証」『マス・コミュニケーション研究』、56 (2000)、pp.130-144
- 深澤弘樹「テレビニュースの娯楽化とマルチモダリティ分析の可能性」『駒澤社会学研究』43 (2011)、pp.27-54
- 藤田真文「テレビニュースの談話分析—キャスターから視聴者への語りかけの分析」『テレビニュースの社会学』伊藤守編、(世界思想社、2006) pp.37-53
- 松尾洋司「テレビニュース番組におけるニュース性 在京3局一週五日間の分析」『NHK放送研究と調査』6月号 (1990)、pp.6-35
- 松葉侑子、上田修一「テレビニュースと新聞におけるエピソード型フレームとテーマ型フレーム」『Library and Information Science』65 (2011)、pp.83-107

執筆 者 紹 介

さい とう ひさ お
齊 藤 寿 雄

現 職：早稲田大学政治経済学術院 教授
専門分野：ドイツ文学

い とう だい すけ
伊 藤 大 輔

現 職：目白大学 専任講師
早稲田大学政治経済学術院 非常勤講師
専門分野：中国語学・言語学

い み な こ
井 美 奈 子

現 職：読売新聞東京本社政治部

なか ひら おさむ
中 村 理

現 職：早稲田大学政治経済学術院 准教授
専門分野：メディア分析

教養諸学研究会 投稿規程

制定 二〇〇四年三月二日

改定 二〇二二年六月一日

早稲田大学政治経済学会評議員会は、会則第二条に規定された「教養諸学研究」を投稿制の雑誌とし、その投稿規程およびそれに伴う諸手続きを以下のよう定める。

1. 投稿資格

著者または共著者の少なくとも一人が、投稿時点において、

- a. 早稲田大学政治経済学部常勤教員
 - b. 早稲田大学政治経済学部非常勤講師
 - c. 評議員が推薦し、編集委員会の同意を得た者
- の中の一つ以上に該当すること。

2. 投稿原稿

- a. 研究論文
- b. 研究ノート・調査資料・調査報告
- c. 翻訳（学術的な価値の認められるもの）
- d. 書評
- e. その他編集委員会が適切と認めた文章

3. 投稿方法

- a. 原稿はすべて、評議員を経由して編集委員会に提出すること。
- b. 原稿は二百字詰原稿用紙換算で、研究論文は百枚以内、書評は三十枚以内とする。
研究ノート・調査資料・調査報告および翻訳は、研究論文に準ずるものとする。2. e. に規定する文章については二百字詰原稿用紙換算で十枚以内とする。
- c. 原稿にはすべて、日本語で千字程度の要旨をつけること。英文またはその他の言語での要旨をさらに付してもよい。ただし 2. e. に規定する文章については要旨を必要としない。

4. 投稿原稿の採否およびそれに伴う手続き

- a. 投稿原稿の採否は編集委員会が決定する。
- b. 当学術誌は査読誌ではないが、編集委員会は採否にあたって、一定の基準に則って審査を行う。

5. 公開

「教養諸学研究」は早稲田大学政治経済学部ウェブサイトおよび早稲田大学リポジトリにおいて公開する。研究論文等を投稿する場合は、これに同意したものとする。

The Liberal Arts Research Center

Rules for Submission of Articles

Enacted: March 2, 2004

Revised: June 1, 2022

The Board of Trustees of the Waseda Society of Political Science and Economics has determined that the Journal of Liberal Arts, as defined in Article 2 of the Society Rules, shall be a journal for submissions, and has established the following rules and procedures for submissions.

1. Eligibility to submit articles

At the time of submission, the author or at least one of the co-authors must be one of the following:

 - a. A full-time faculty member at the Waseda University School of Political Science and Economics
 - b. A part-time lecturer at the Waseda University School of Political Science and Economics
 - c. A writer recommended by a trustee and approved by the Editorial Board
2. Types of articles accepted
 - a. Research papers
 - b. Research notes, research material, research report
 - c. Translations (of recognized academic value)
 - d. Book reviews
 - e. Other types approved by the Editorial Board
3. Submission procedure
 - a. All manuscripts must be submitted to the Editorial Board via the trustees.
 - b. Article length is limited to 100 pages for research papers, with one page considered to equal 200 Japanese characters (including punctuation, spaces, etc.). The same applies to research notes, research materials, research reports, and translations. Article length is limited to 30 pages for reviews and 10 pages for other types approved by the Editorial Board.
 - c. All articles (except those of types stipulated in 2e) must contain an abstract in Japanese of 1000 characters. Additional abstracts in English or other languages are also permitted.
4. Acceptance or rejection of submitted manuscripts and accompanying procedures
 - a. Acceptance or rejection of submitted manuscripts is to be determined by the Editorial Board.
 - b. Although the journal is not a peer-reviewed journal, the Editorial Board adheres to certain standards in reviewing for acceptance or rejection.
5. Publication

“Journal of Liberal Arts” will be published on the website of the School of Political Science and Economics and registered in the Waseda University Repository. By submitting research papers or other materials, you are deemed to have agreed to this.

早稲田大学政治経済学部教養諸学研究会

(五十音順)

会長 齋藤純一
評議員 生駒美喜 井上淳 ○岡本暁子
○岡山茂 荻野静男 齊藤泰治
齊藤寿雄 ○シュラトフ・ヤロスラフ ○ソジェ内田恵美
○玉置健一郎 中村理 ○野邊厚
平林宣和 ○ブロッソー・シルヴィ ○マルティ・オロバル・ベルナット
室井禎之 八木斉子 ロペス・パサリン・アルフレッド
ロミオ・ケネス

(○印は編集委員)

編集代表 ブロッソー・シルヴィ
会計監査 井上淳

2023年3月24日 発行

教養諸学研究 第百五十一号

編集人 齋藤純一
発行人

印刷所 三美印刷株式会社

発行所 169-8050 東京都新宿区西早稲田一丁目六番一号
早稲田大学政治経済学部内

早稲田大学政治経済学部教養諸学研究会

前 号 目 次

- American Pacific Whaling at Hakodate before
the Meiji Restoration Steven IVINGS
- 日本について発信する英語教育
—経済学部の学生の意識調査と授業実践例— 堀 江 恭 子
- L'aventure japonaise de Mirra Alfassa (1916-1920) :
comment la rencontre avec le Japon façonna la Mère
..... Anne-Aurélié SEYA
- 遺伝子治療用製品の研究開発および製造過程の分析
—生体試料の生-資本分析へ向けて— 花 岡 龍 毅
- 小説の翻訳にみる中国語と日本語のオノマトペ
—郝景芳の作品から— 孫 琦
- 朝日新聞と読売新聞の社説における原発報道の論調とフレーム
..... 名和 旭・中村 理
- D'instrument politique à emblème culturel : perspective
diachronique sur le théâtre de Guan Suo (Yunnan, Chine)
政策手段から文化の象徴へ——中国雲南省の「關索戲」における
通時的視点 Sylvie BEAUD

Journal of Liberal Arts

Nos. 151

March 2023

Contents

- Noten zu den Gedichten von Peter Huchel Hisao SAITO
- Chinese Adjectival Sentences with VO Subjects Daisuke ITO
- Consonance in Television Coverage of Tokyo 2020 Olympics Bid
..... Minako I, Osamu NAKAMURA

The Liberal Arts Research Center
The School of Political Science and Economics
Waseda University
Tokyo, Japan